

宮古市埋蔵文化財調査報告書**30**
A Report on the Archaeological Research
in Miyako City, No.30

金浜 I 遺跡

—昭和58年度発掘調査報告—

大付遺跡

—平成2年度発掘調査報告書—

1992.3

岩手県宮古市教育委員会

The Miyako Board of Education

Miyako, Iwate, Japan

序 文

宮古市内には、これまでの分布調査や文化財パトロール事業などの成果により、埋蔵文化財包蔵であります遺跡が443カ所も確認されております。

近年、各種開発事業に伴うこれら遺跡の発掘に先だつ事前協議の件数も年ごとに多くなって来ました。宮古市教育委員会では、この様な事前協議を積極的に行ない、遺跡の保護に努めてまいりました。しかしながら、止むを得ず遺跡の発掘が回避できない場合については、教育委員会が主体となり発掘調査を実施して来ました。

さて本書は、昭和58年度（1983）に宅地造成工事に先だち実施した金浜Ⅰ遺跡と平成2年度（1990）に実施した個人住宅建築工事に先だつ大付遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものでございます。特に、金浜Ⅰ遺跡は、発掘調査終了後9年間も未報告であったものであります。本来的には、すみやかに報告書を刊行すべきものでしたが、諸般の事情により今日まで延びてしまいました。今後、逐次、今まで未報告であるものについては、その成果を公表して行かなければと考えております。

金浜Ⅰ遺跡においては、縄文時代早期後半から近世に至るまでの遺物を出土しています。特に、縄文時代前期初頭、後期の土器がその中心となっています。

大付遺跡は、すでに明治年間より知られていた著名な遺跡で、昭和54年（1979）には縄文時代晩期の屈葬人骨なども調査されています。今回は、調査面積や調査区の状態などにより、検出遺構・遺物量はあまり多くはありませんでしたが、縄文時代後期の墓壙跡などを調査しました。

最後になりましたが、発掘調査および本書の作成にあたりご協力をいただきました関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成4年3月

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

例 言

1. 本書は、昭和58年度（1983）年に実施した^{ヤハヒ}金浜Ⅰ遺跡及び平成2年度（1990）に実施した大付遺跡の緊急発掘調査報告書である。なお、金浜Ⅰ遺跡の名称については、従来“金浜古館遺跡”と呼称している人もいるが、宮古市教育委員会刊行の『分布図86』で使用している金浜Ⅰ遺跡とする。
2. 発掘調査は、いずれも宮古市教育委員会が主体となって実施したもので、金浜Ⅰ遺跡については、中嶋隆（当時、宮古市文化財保護審議委員）が大付遺跡については鎌田が担当した。本書の執筆、作成に際しては、金浜Ⅰ遺跡については中嶋の原稿を基に鎌田があたり、高橋・阿部がこれを補佐した。大付遺跡については、鎌田が担当し、高橋、阿部がこれを補佐した。
3. 土層観察に際しては、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄 1967）を参考とした。
4. 遺構・遺物の表現については、次の通りとした。



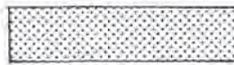
焼 土



胎土中に植物繊維含む土器



石 (断面)



敲打磨石類の機能面

5. 発掘調査及び本書の作成にあたり、以下の方々よりご教示、ご指導をいただいた。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

岩手県教育委員会文化課	相原 康二	岩手県埋蔵文化財センター	小田野哲憲
〃	高橋 信雄	宮古市教育委員会市史編さん室	岸 昌一
〃	熊谷 常正	〃	竹下 将男
岩手県立博物館	佐々木清文	宮古市文化財保護審議委員	斎藤 英樹
〃	佐藤 嘉則		

6. 本文中の引用文献は次のとおりとした。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1979	【宮古市大付遺跡発掘調査報告書】	小田野哲憲 熊谷 常正	→	【大付報文79】
1983～86	【宮古市遺跡分布調査報告書 1～4】	武田将男	→	【分布調査1～4】
1986	【宮古市遺跡分布図 昭和60年度版】	武田将男	→	【分布図86】
1987～91	【崎山遺跡群 I～V 昭和61年発掘調査概報～平成2年度発掘調査概報】	高橋憲太郎	→	【崎山遺跡群 I～V】
1985	【金浜館－昭和55年発掘調査報告書】	武田 将男	→	【金浜館85】
1989	【千鶴遺跡－昭和62年度発掘調査報告書－】	鎌田 祐二	→	【千鶴89】

目 次

序 文

例 言

目 次

(金浜 I 遺跡)

I 調査経過	
1 調査に至る経過	1
2 調査要旨	1
3 調査体制	1
II 遺跡をとりまく環境	
1 金浜 I 遺跡の位置と環境	2
2 金浜 I 遺跡の地形と周辺の遺跡	2
III 調査内容	
1 調査の方法	7
2 基本層序	7
3 検出した遺構	8
4 出土遺物	10
IV 調査のまとめ	21

(大付遺跡)

I 調査経過	
1 大付遺跡について	23
2 調査に至る経過	24
3 調査要旨	24
4 調査体制	24
II 遺跡をとりまく環境	
1 遺跡の位置と立地	28
2 大付遺跡と周辺の遺跡	28
III 調査内容	
1 遺跡の現況	29
2 検出した遺構・遺物	29
IV 調査のまとめ	34

挿 図 目 次

第1図	金浜Ⅰ遺跡位置図	3
第2図	金浜Ⅰ遺跡と周辺の遺跡	4
第3図	金浜Ⅰ遺跡周辺地形図	5
第4図	金浜Ⅰ遺跡周辺地形分類図	6
第5図	金浜Ⅰ遺跡基本層序柱状模式図	8
第6図	金浜Ⅰ遺跡調査グリッド配置図	9
第7図	金浜Ⅰ遺跡出土遺物①	11
第8図	〃 ②	14
第9図	〃 ③	16
第10図	〃 ④	17
第11図	〃 ⑤	19
第12図	〃 ⑥	20
第13図	大付遺跡と周辺の遺跡	25
第14図	大付遺跡周辺地形図	26
第15図	大付遺跡周辺地形分類図	27
第16図	大付遺跡調査区全体図	30
第17図	大付遺跡小ビット群土層断面図	31
第18図	大付遺跡第1号土城跡	32
第19図	大付遺跡第1号土城跡出土土器	32
第20図	大付遺跡出土石器	33

写真図版目次

(金浜I遺跡)

- 第1図版 金浜I遺跡調査前景観、同左、同左(近景)
第2図版 調査グリッド設定状況①、同左②、同左③
第3図版 ♪ ④、同左深掘状況、同左土層断面
第4図版 柱穴検出状況①、同左②、焼土検出状況
第5図版 柱穴(完掘)①、同左②、柱穴(断面)
第6図版 土器片出土状況、土器片及び貝殻出土状況、石鏃出土状況
第7図版 出土土器(縄文-縄文土器)、同左裏面
第8図版 ♪ (第7図の一部)、出土石器と軽石
第9図版 出土鉄製品(第12図)

(大付遺跡)

- 第10図版 崎山遺跡群と大付遺跡(空中写真)、調査区景観
第11図版 遺構の検出状況①、同左②
第12図版 第1号土壙跡(完掘)、同左(断面)
第13図版 ♪ 出土土器、同出土礫石器(第20図4)
第14図版 遺構外出土礫石器(第20図1)、同石器(第20図2、3)と扁平円礫

付表目次

(大付遺跡)

- 第1表 小ピット群計測値一覧表.....29

金 浜 I 遺 跡

I 調査経過

1 調査に至る経過

金浜Ⅰ遺跡は、宮古市金浜第2地割字古館地内に所在する。発掘調査時の昭和58年（1983）当時は、金浜西№3（古館）遺跡と呼称されていたが、昭和57～60年度にかけての市内遺跡詳細分布調査（金浜地区に関しては、昭和58年度対象で『分布調査2』）及び『分布図86』刊行時に金浜Ⅰ遺跡として周知されている。宮古市遺跡コードは、L G43-2342である。

市内遺跡詳細
分布調査

本遺跡の発掘調査は、遺跡内における宅地造成工事（昭和58年5月、(株)宮古土地より申請）に先だつもので、申請者と宮古市教育委員会との事前協議、並びに市教委と岩手県教育委員会文化課との協議を経て実施されたものである。なお、発掘調査に際しては、当時、調査員1人体制であり、しかも複数調査現場を抱えていたため、当時、宮古市文化財保護審議会委員であった中嶋隆を調査員とした。

事前協議

2 調査要旨

調査地点 宮古市金浜第2地割字古館5の9、10、8の1、2、8、11、13、14、92番地

調査原因 宅地造成工事に先だつもの

調査期間 昭和58年5月19日～同年7月2日

調査面積 約3,360㎡

検出遺構 堅穴住居跡及びその柱穴跡と考えられる小ピット群のほか、堅穴に伴うと考えられる焼土の広がりなどを確認しているらしいが、当時の記録（図面を作成しなかったらしい）が無いため詳細は不明。

検出遺物 縄文時代早期から前・中・後・晩期に亘る各期の土器片が出土しているが、いずれも小破片が多く全体像を把握できるものはない。その他、石匙などの石器類、平安時代の土器片や鉄製品、陶器片等が若干量出土している。

3 調査体制

発掘調査は、昭和58年に実施しており当時の調査体制は次の通りであった。

調査主体 宮古市教育委員会（教育長 野口健造）

調査総括 宮古市教育委員会社会教育課長 藤田 利美

事務総括 〃 係長 若狭健一郎

調査担当 〃 文化財保護審議会委員 中嶋 隆

〃 〃 社会教育課主事 武田将男

II 遺跡をとりまく環境

1 金浜 I 遺跡の位置と環境

金浜 I 遺跡は、宮古湾奥の北西岸の金浜地区の西端部の小高い畑地に在る。位置的には、宮古市役所より直線距離にして南西方向に約5.1km余の地点で、国道45号線金浜バス停より八木沢地区へ至る道を約1.6km程西方へ入ったところ、金浜地区集落の最奥部に位置する。

古街道

遺跡の周辺の東から南方面には、雑木林や竹林が広がり、西方には八木沢地区から金浜・津軽石地区馬越に至る古街道（註）が通り、更にその西方をJR山田線が走っている。当該地は、ちょうど八木沢地区と津軽石地区のほぼ中間地点にあたる。遺跡西方の山手より流れ出る小金が沢と大金が沢の2つの沢は、この付近で合流し、更に少し下流で八木沢大谷地方面からの流れと合流し金浜川となり浜へ達している。現在の金浜川は、全くの小川と言っても良い程のゆるやかな流れであるが、発掘調査の結果などから考え合わせると往時（縄文時代以降？）は、かなりの急流で1m四方もの花崗岩の押し出しも数回程度はあったことが推測される。

なお、現在の金浜地区の海岸は、宮古湾最深部に注ぐ津軽石川の運ぶ土砂とともに砂浜が広がっており、海苔・カキ・二枚貝（アサリやホッキ貝など）、その他魚介類の豊富な海岸である。また、当遺跡の西方には森林が広がっており、まさに、海、山、河の幸に恵まれた絶好の環境であったことが想像される。

（註）現在の国道45号線は新設道路であり、これ以前は、この道路が宮古市中心部に通じる中心道路であった。古くは、“浜街道”といわれている古街道にあたる。

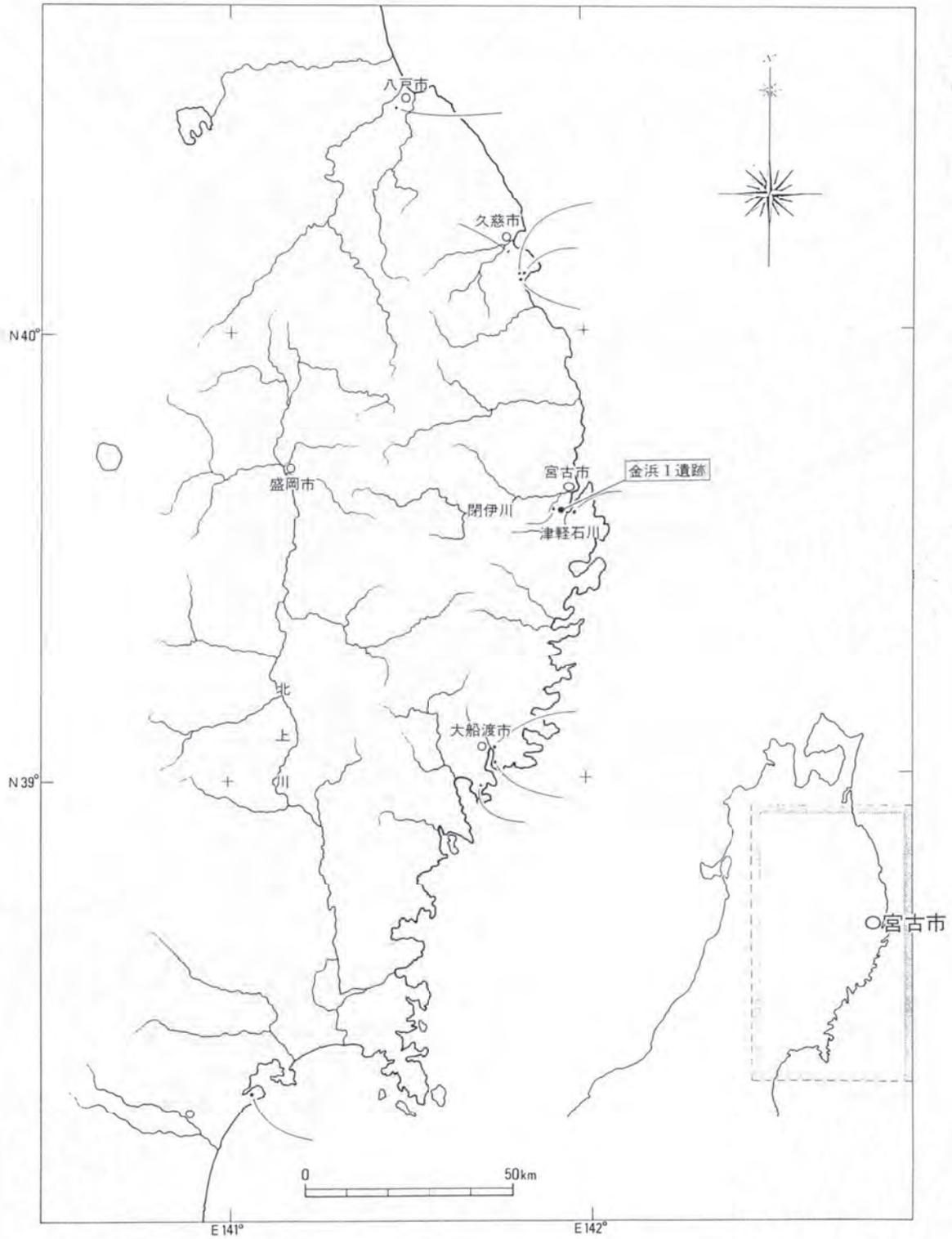
2 金浜 I 遺跡の地形と周辺の遺跡

遺跡は、前項でも記した通り金浜地区の最奥部に位置しており、西側に広がる中小起伏の山地帯より流れ出る沢によって開析された緩斜面状の平坦面に立地している。この緩斜面や平坦部には、当遺跡のほかに金浜Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ遺跡が立地しており、ほぼ全域に遺跡が分布している状況である。また、この小河川（金浜川）をはさみ込むようにふたつの独立した丘陵が張り出しており、このうちの北側の標高34mの丘陵の先端部には、中世の城館跡である金浜館跡が立地している。この金浜館跡は、昭和55年度（1980）に発掘調査が実施されており、15世紀後半頃のほぼ完形品の天目茶碗が2個体出土するなど、数多くの成果が上げられている。詳細については、『金浜館85』が刊行されているのでそちらを参照願いたい。

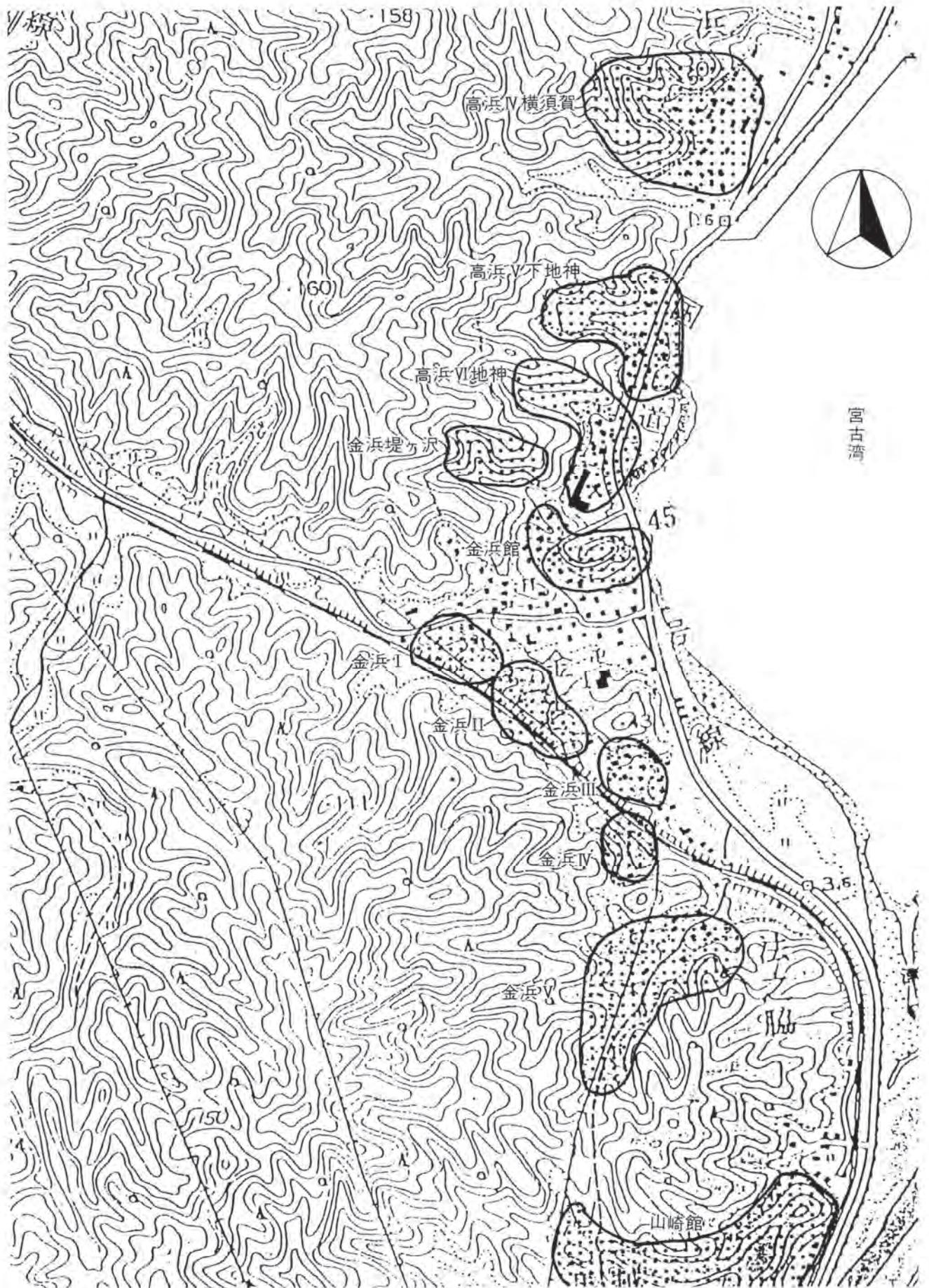
金浜館跡

天目茶碗

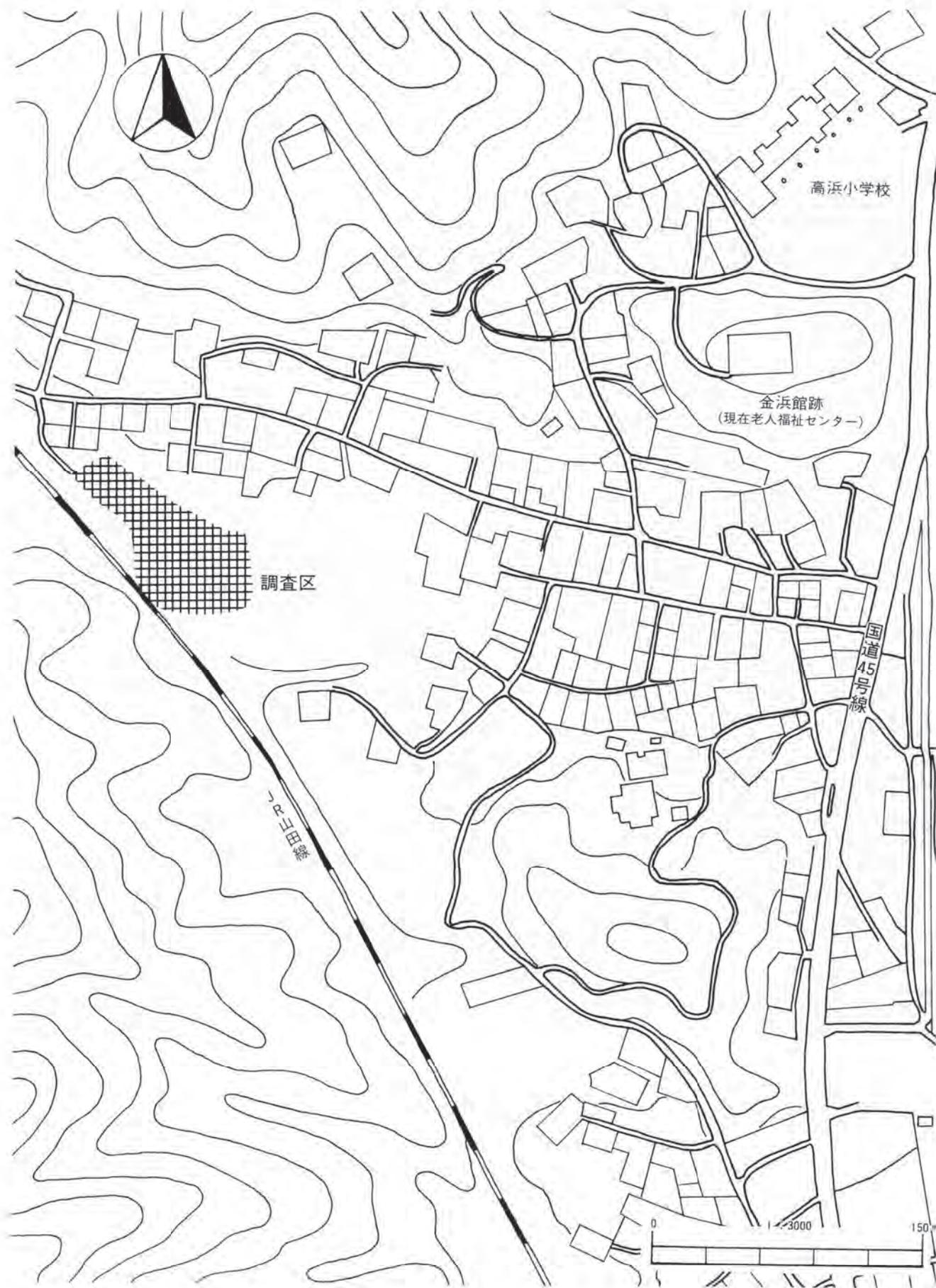
〔金浜館85〕



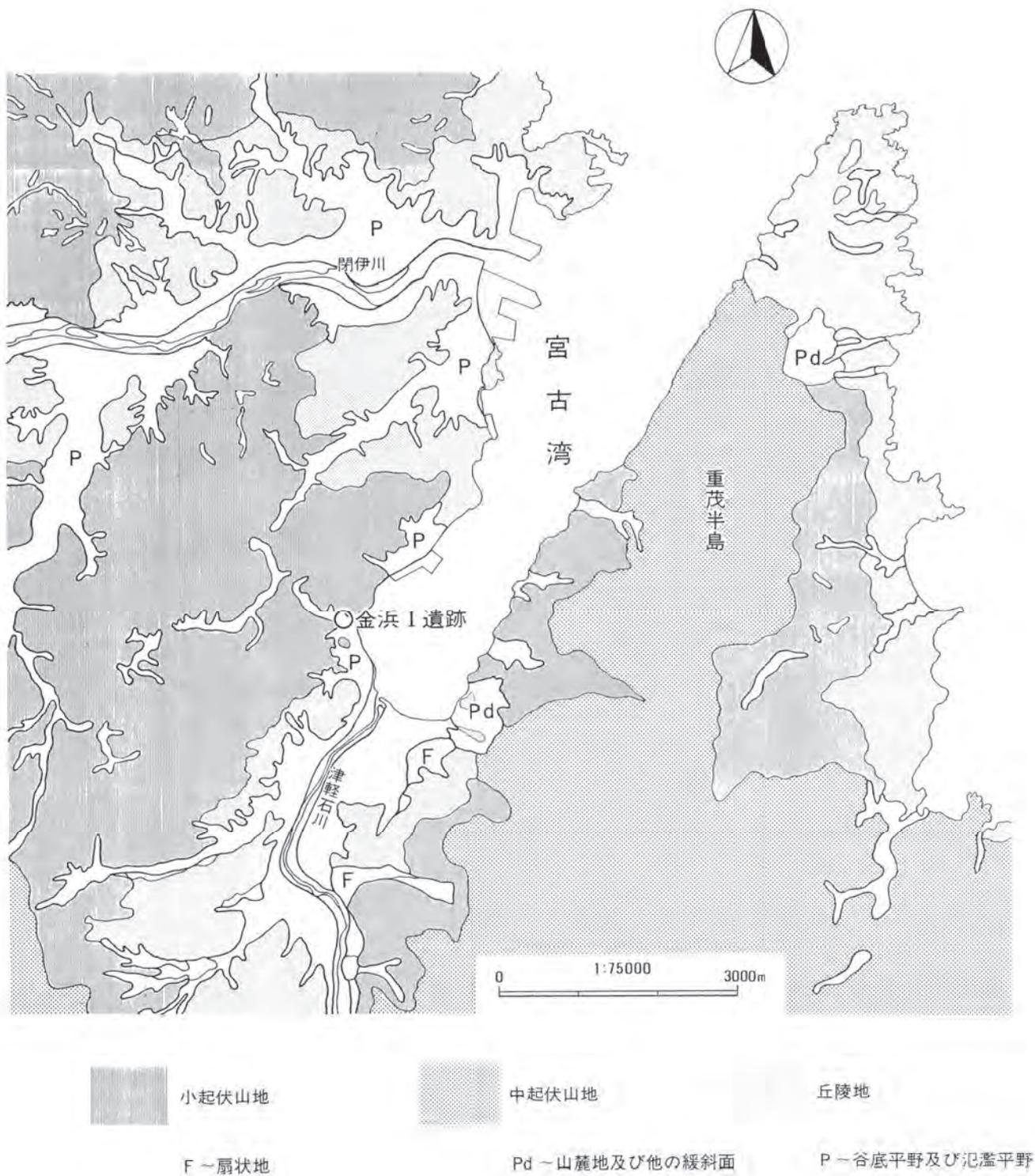
第 1 図 金浜 I 遺跡位置図



第2図 金浜Ⅰ遺跡と周辺の遺跡



第3図 金浜I遺跡周辺地形図



第4図 金浜 I 遺跡周辺地形分類図

Ⅲ 調査内容

1 調査の方法

(1) 野外調査について

調査対象区の全体が上下2段の畑地にわかれているが、元々は連続した一連の緩斜面であったと考えられる。調査は、遺跡の現況に合わせ第6図の通りグリッドを設定し西側からA・B・C…、西側から1、2、3……の番号を付しA1、A2、A3……グリッドと呼称した。なお、実際現地調査時には、山側・沖側の上・下・中などと呼称したらしいが、中嶋が、整理時に命名しなおしたものである。各グリッド間のベルト幅は20cmで出土遺物は、各グリッド名を付し取り上げている。基本層序の柱状図は、第6図の①、②、③地点において作成したものである。全体図については作成しておらず、ここでは、中嶋が作成したグリッド図(第6図)をそのまま使用しているが、スケール等については不明である。また、出土遺物の層名、層位関係についてもほとんど不詳である。

グリッド

(2) 整理作業及び報告書作成について

前述の様な状況と出土遺物をはじめとするデータは、調査後中嶋が所持していたため整理作業及び報告書原稿執筆まで中嶋に依頼したが、土器断面や石器図版などの未作成、写真、拓影図などそのままでは使用不可能なものが多かったので、再整理を行なった。報告書原稿についても同様であったため中嶋の原稿を基に再構築した。なお、本報告にあたっては、(1)の状況下で調査が実施されているため、各グリッド毎に出土した遺物を掲載するだけに留めた。

2 基本層序(第5図)

基本層序は、A1グリッド東側地点(第6図①地点-山裾近く)、B7グリッド南東側地点(同②地点-旧畑地のほぼ中央部)、E9グリッド東側地点(同③地点-沢の近く)の3地点で作成したものである。観察された土層は各地点により異なるが、1層の黒色土(耕作土)と2層の黒黄混砂黒土、3層の黄褐色粘土は、水田造成時に再堆積したもので遺跡全体に広がっている。

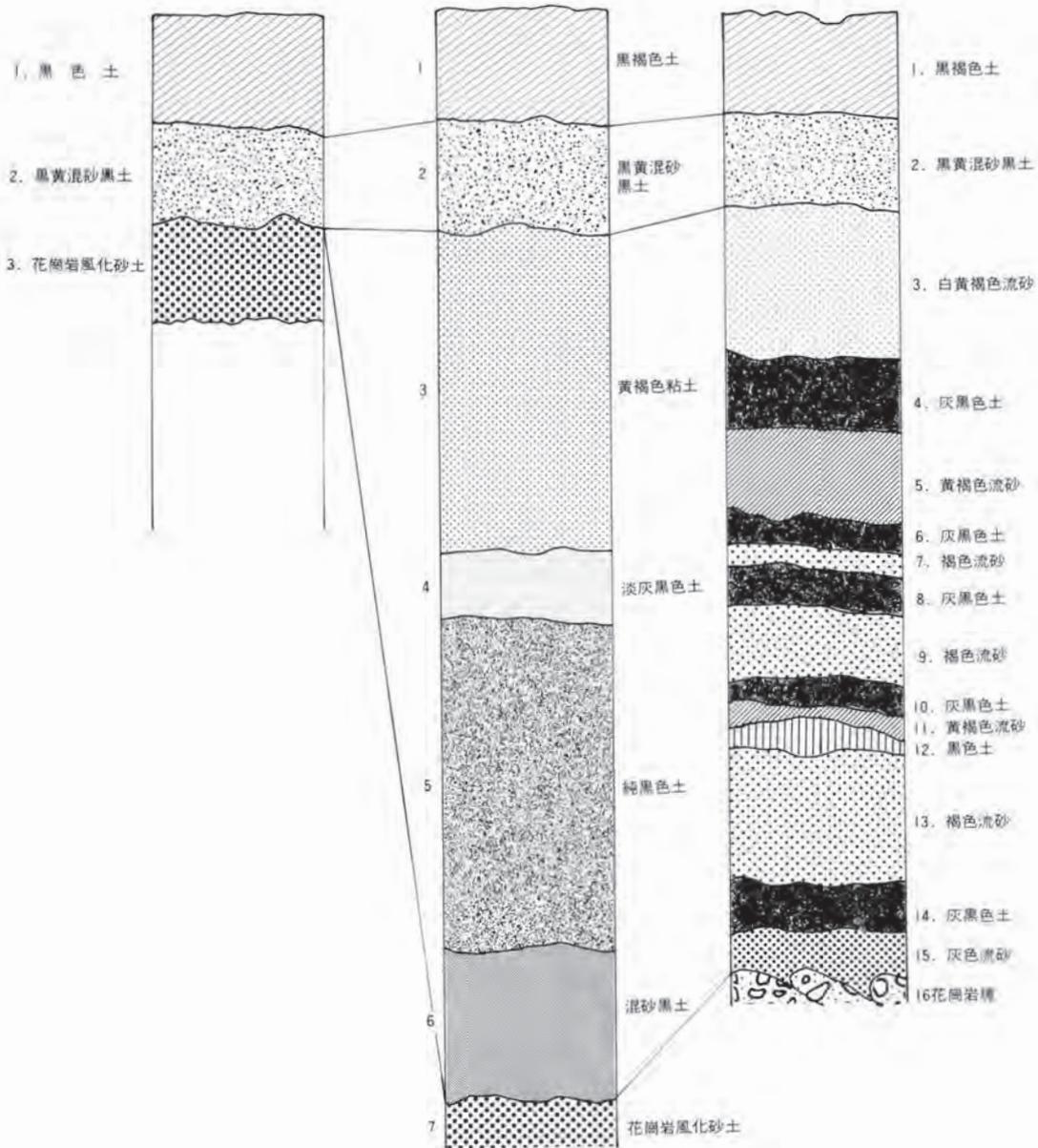
基本層序

①地点は、1、2層下が花崗岩風化砂土(地山)で山裾の様相を示している。②地点では、搬入土以下の4層の淡灰黒色土、5層の純黒色土層において堅穴住居跡に伴うと考えられる柱穴状ピット群や土器片の散布が確認されたが、6層以下には遺物の包含は認められない。③地点では砂の混入する層が多くみられ沢筋の様相を示している。この地点では、12層とした黒色堆積土中に土器の包含が集中していた様である。

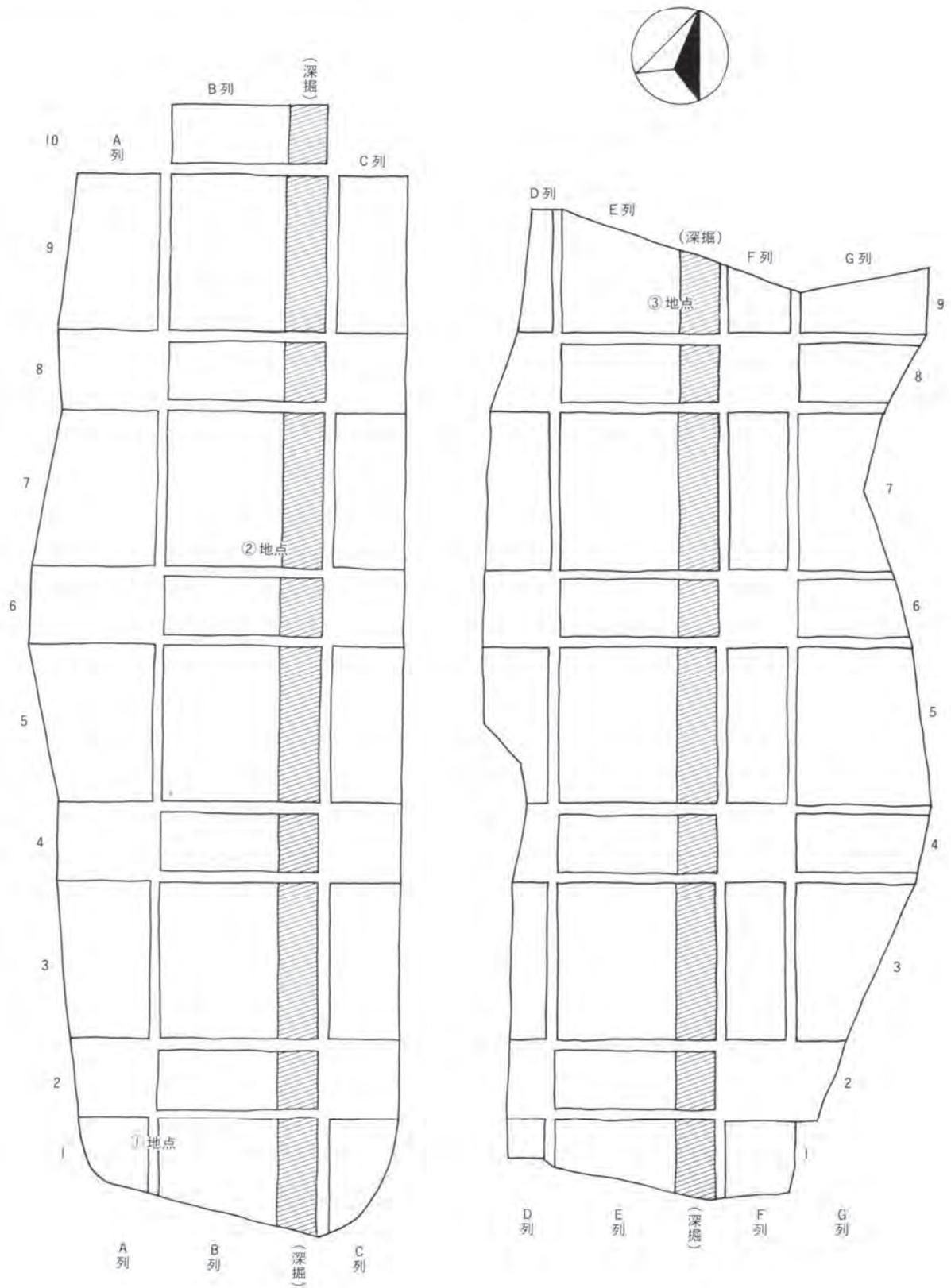
なお、各地点において確認できた土層の相互関係、対応関係については、1層～3層と最下層の花崗岩風化土層以外については、全く不明である。また、出土した土器がどの層からの出土なのかについても注記されておらず不詳であり、どの層がどの時代、時期の遺物を包含するものかは不明と言わざるを得ない。

3 検出した遺構

既述の通りB7グリッドより柱穴と推定されるピット群や焼土の拡がりが出したが、図面としての記録が残っていないので詳細は不明である。ただし、写真をみると径が0.1m前後から0.35m前後の円形プランを呈するピット群のまとまりがあり、掘立柱建物跡の様な感じでない配置状況である。また、柱穴状のピットも上層?と下層?のもの2時期?があったらしいが詳細は不明。更に、上層の柱穴とともに確認された焼土層及び焼土面より刀子片などの鉄製品や陶磁器片で出土しており、少なくとも上層の柱穴群を伴う堅穴というのは縄文時代のものとは考えられない。下層の柱穴群については、縄文-縄文土器片が共伴しているらしいが、詳細は不明であり、詳述は避けることとする。



第5図 金浜I遺跡基本層序柱状模式図



第6図 調査区全体図

4 出土遺物

ここでは、何度も記述している通りの状況であるため、各グリッド毎にその出土遺物も掲載することに留める。なお、粗掘り段階で出土（基本層序1、2層中の遺物か）とそれ以外のものに一応分けている。また、縄文時代の土器以外のものについては後述する。

4-1) 縄文時代の遺物

① B7グリッド出土遺物（第7、8図）

一部深堀（下層か）と注記が為されているものも入っているが、主にそれ以外のもの（深堀より上層のものか）を掲載した。B7柱穴床面としたものは、検出遺構でも記した中の上層の柱穴群に伴うものである。B7南境としたものは、B7上層と同じものか。

第7図1～44は、一見して縄文時代早期の貝殻文土器から同後期の帯縄文を施すものまで混在している様である。

貝殻文土器

1は貝殻文を施文するもので、今回の調査で出土した唯一の貝殻文土器である。比較的薄手で胎土もち密で焼成も良好である。貝殻の腹縁部で施文しており何らかの文様を構成するものと考えられるが、小破片のため不明である。縄文時代早期後半に伴うものと思われる。2は条痕文を施すもの。薄手の土器だが、1同様胎土、焼成ともに良好なものである。口縁部はやや内湾気味となっている。縄文時代早期後半～末葉に伴うものと思われる。3～17は胎土に植物

条痕文

繊維を含むもので縄文時代前期初頭～前半に伴うものである。3は不整撚糸文を横位に施文するもので、口縁部上面を平坦に整形している。大木1式に伴うものと思われる。5は無文の口縁部上部に2条の平行沈線を施文するもので、沈線下には比較的節径の大きい縄文を施す。3と同様に口縁部上面を平坦に整形している。4、6～13、15、16は縄文を施文主体とするものである。4は口縁部片でやはり口縁部上面を平坦にしている。6、10、11は所謂、びっちり縄文といわれるものである。16は羽状縄文となるものか。14は撚糸圧痕文を施文するものだが、

大木1式

原体の方向を変え「ハ」字状に施文している。19は平行沈線間に縄文を施文するもので帯縄文となるものか。縄文時代後期に伴うものと思われる。20～28は隆沈線で文様を描くもので縄文時代中期中葉に伴うものと思われるが、時期的には差があるものである。20は口縁上面を平坦に整形するもの。21は波状口縁となるもので口縁上端に刻目を施し波頂部に合わせて隆沈線で文様を描いており、縄文時代中期の中でも古い時期のものと思われる。21は丁寧に調整された縦位の隆沈線を施すもので大木8b式に伴うもの。27は渦巻状の文様となるものか。29は磨消し技法の区画文を施文するもので縄文時代中期後葉、大木9～10式に伴うものと思われる。30～33は縄文時代後期に伴うと思われるものである。30、32、33は平行沈線間に縄文を施文して

縄文時代後期

縄文時代中期

おり、32は羽状縄文の施文が認められる。34、35はB7グリッド深堀により出土したもので、胎土に植物繊維を含んでおり縄文時代前期初頭に伴うものである。36～44は底部片で木葉痕の認められるもの（36～42）と網代痕の認められるもの（43、44）がある。



第7図 金浜I遺跡出土遺物 ①

② B7グリッド深掘出土遺物（第8図）

第8図の土器は、B7グリッドの深掘り部分で出土したもののうち第7図に掲載したもの以外の土器、すべて縄文—縄文土器である。検出遺構で記した下層?の柱穴群及びその周囲の面（堅穴住居跡の床面?）より出土したものらしい。1～34までが前述の土器で35～37は中嶋が当遺跡より表採したもので、B7グリッド深掘りとは無関係なものである。

1と2の口縁部片以外は、すべて胴部の破片であるが底部片を欠いており全体の器形を知ることができない。1と2の口縁部上端の形状が若干異なっている様にみえるが、2の口縁部分が極く一部しか残っていないが、1と同様若干ではあるが外側に突き出ており、更に、胴部からの立ち上がりもほぼ似かよっている。また、1～34の土器片の胎土や焼成・色調、施文されている縄文などすべての点において類似しており、これら34個の破片は同一個体のものと判断される。胎土中には、植物繊維を含んでいるが量的には大量に入っているというのではなく少量である。また、やや粗い砂粒が比較的多く認められる。焼成自体は良く脆弱な感じはしないが、堅くしまったという感じはない。色調は大方表面は明褐色～明赤褐色、裏面はやや暗い灰黄褐色～明るい黒褐色を呈する。文様である縄文は、表面に比らべて裏面の方はかなりまばらとなり不明瞭なものが多い。縄文粒の節径は比較的大きく粗いものである。

1は、口縁部の破片で口縁部上面を平坦に整形しており、その上面には指頭圧痕を施している。口縁部上端外面は、ひさし状に突き出ている。2も口縁部片だが、口縁部上端がわずかしか残っていないが、ほぼ1と同じ様になるものと考えられる。3～34は、すべて胴部の破片である。厚さも0.7～0.9cm内外とほぼ一様となっている。胴部片の中でも傾きあるものは底部に近いものと考えられ、口縁部の破片と合わせて考えると外傾気味の器形になると推測される。

以上の1～34は、縄文時代早期後半～未葉に所属するものと考えられる。

35～37は、中嶋が当地より表採した資料である。3片とも小破片であるが、胎土・焼成ともに良好なものである。胎土は、きめ細かくち密である。焼成は極めて良く堅くしまっている。色調は、表面がやや明るい黒褐色で裏面は褐色が強くなっている。内外面ともに丁寧に調整されており、外面には縦・横・斜位に格子状に微隆起線文を施文するもので、何らかの文様を構成する様である。

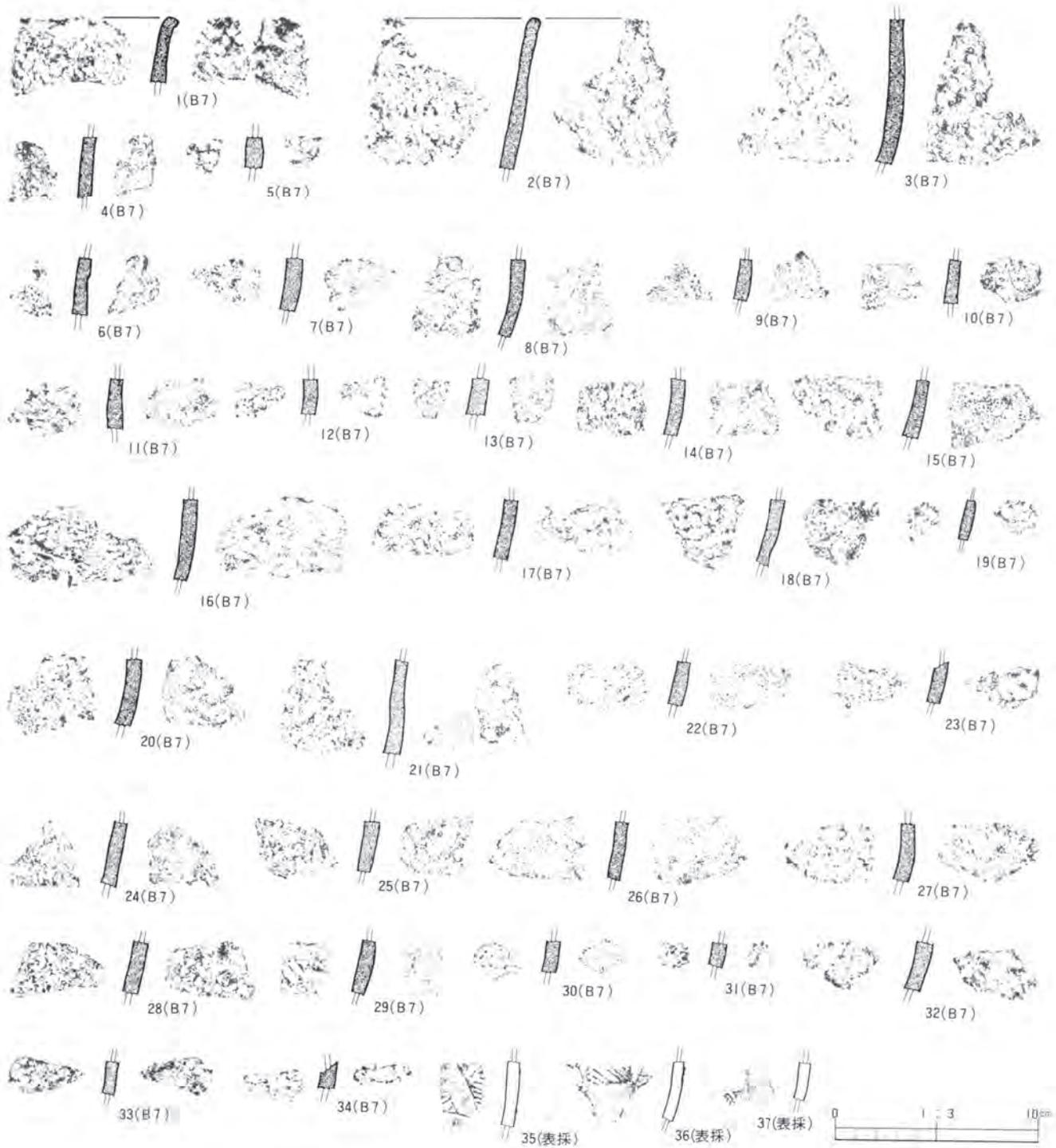
これらの土器は、縄文時代早期後半に所属するものと考えられる。

以上の①と②がB7グリッドから出土した土器であるが、一応上層と深掘（下層?）の2層に分類されるようであるが、上層の柱穴の底面から縄文中期の土器片（中期の中でも若干幅がありそうである）が出土しているが、下の層のものである可能性が否定できない。また、第7図20、23は深掘より出土しており、完全に時期差のある出方でないものと考えられる。

③ D3～E9グリッド出土遺物

第9図1～79は、D～Eの各グリッドから出土したもののだが、どの層から出土しているのかなどについては不明である。

1と2はD3グリッドから出土したもので、どちらも胎土に植物繊維を含んでおり縄文時代前期初頭に所属するものと考えられる。1は横位に羽状縄文を施すもので比較的太く節径の大きい原体を用いている。2は、斜縄文のみの施文である。3～5は、D7グリッドから出土したもので、4には胎土中に植物繊維が含まれている。3は横位にS字状連鎖沈文を施文するもので縄文の施文は認められない。縄文時代前期前葉、大木2式に伴うものか。4は、1とは反対に短かく節径の小さい原体を用いて結束部の有する羽状縄文を施文するものである。縄文時代前期初頭に伴うものと考えられる。5は底部片で、網代痕の認められるもの。6、7は、D9グリッドから出土したものである。6は、沈線と刺実文で文様を描くもので円状に沈線を施こしている。7は、横位の原体圧痕文を施文するものである。6、7は縄文時代中期前葉に伴うものと思われる。8は、E1グリッドから出土したもので、薄手の無文の土器片である。9は、B7グリッド上層から出土したもので、口縁部が外反する。口縁部上端が無文で細かい縄文を施文している。10～12は、E2グリッドより出土したもので、10は9同様、斜縄文を施文しているが、口縁部上端は無文となっている。口縁部上面は平坦に整形され若干、外削となっている。11は、木目状撚糸文を施文するものか。12は縄文のみの施文である。13～21は、E3グリッド出土のもの。13、14には、植物繊維の混入が認められる。13は、羽状縄文を施文するもので、14は縄文のみの施文である。これらは、縄文時代前期に伴うものと考えられる。16～21は口縁部の破片。16は、内面側が剥落している。口縁部上面を平坦に整形し外面にひさし状に突き出る。17は、竹管による円形刺突と隆帯で文様を施文するもので縄文時代前期前半、大木3～4式に相当するものと思われる。18～21は、縄文を主体とするもので20、21の口縁部は、内削気味で外傾するものである。22～24は、E4グリッド出土。22は、口縁部を無文とし頸部に刺突列を施すもので、縄文時代中期中葉に相当する。23、24は、沈線文と磨消し部により文様が描かれており縄文時代後期に伴うものか。25～28は、E5グリッド出土のもので胎土中に植物繊維の混入が認められ、縄文時代前期に相当するものである。25、27は、口縁部上面を平坦に整形しており口縁部に不整撚糸文を施文する。大木1式に伴うものか。26は羽状縄文を施文する。28は、回転方向を変えた斜縄文を羽状に展開するものと考えられる。29、30は、E6グリッド出土、29は、横位のS字状連鎖沈文を施文するもの。30は底部片で植物繊維の混入するもの。31～46は、E7グリッドから出土したものである。31は、口縁部が外反し1条の沈線下に縄文を施文する。32は、口縁が大きく外反し頸部が屈曲する無文のものである。33～43は、胎土に植物繊維を含むもので縄文時代前期に所属する。いずれも縄文以外の施文要素を持たないものであるが、縄文の比較的大きなもの(33、34)と小さなもの(35～40)がある。46は無文の土器である。47～71は、E9グリッドから出土したもの。47～51は口縁部片だが、いずれも縄文主体のものである。50は無文のものか。47～49の口縁部の形状は似かよっているもので47と49は同一個体の可能性が高い。52・53は、網目状撚糸文を施文するもので縄文時代前期前半、大木2式に相当するものか。54・55は、円形の刺突文がみられるもの。56～60、62は、縄文主体のもの。64は、横位の撚糸圧痕文を施文するものである。65は無文、66～70は縄文主体の



第8図 金浜Ⅰ遺跡出土遺物 ②

土器。71は、底部片で網代痕が認められる。72～79は、E 9 グリッドより出土したものである。72は、平行沈線間に縄文を帯状に施文したり磨り消したりする。73、74は、縄文施文後に沈線を施しているもの。72～74は、いずれも縄文時代後期に相当するものと思われる。75～79は、縄文以外に施文技法を持たない縄文主体のものである。

以上の各グリッドの土器をみていくと、E 5、E 6、E 7、E 8 グリッド内では縄文時代前期を主体としており、E 9 グリッドに縄文時代後期を中心に出土しているようである。

④ Bグリッド、Cグリッド、Gグリッド出土土器（第10図1～25）

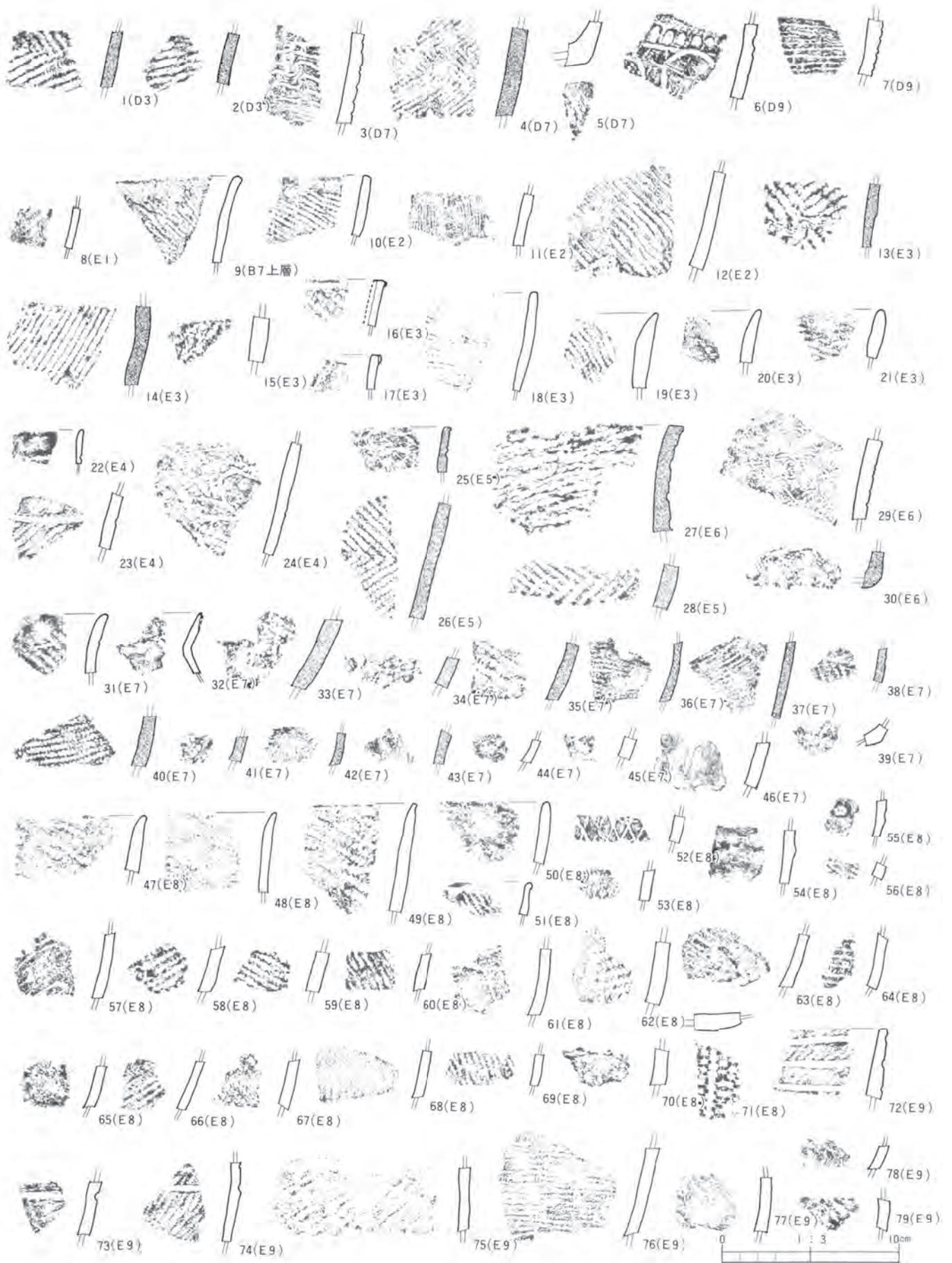
B 7以外のBの各グリッドとC 7グリッド、Gの各グリッドから出土したものである。以下、個々の土器について記す。

1は、B 4グリッドから出土したもので、口縁部が外反する器形となるもので、口縁部が無文となる。縄文時代中期中葉に相当するものと思われる。2、3はC 7グリッドから出土したものである。2は、基本層序4層目?の淡灰黒色土（旧耕土）層から出土したものである。口縁部の破片で口縁部上面を平坦に整形しており、沈線2本による逆三角形の区画内を磨消している。縄文時代後期に伴うものと思われる。3は、口縁部上端に2条の平行沈線を施すだけの無文のものである。縄文時代後期末から晩期に相当するものか。4～8は、B 8グリッドより出土したもので、いずれも胎土に植物繊維の混入が認められ、縄文時代前期に所属するものである。4、5、7は不整撚糸文を施文するもの。7は、器厚が1.2cmをはかる厚手のものである。6は、回転方向を変えて斜縄文を羽状に展開する。8は、羽状縄文を施文する。9～11は、B 9グリッドから出土したもので、9は、口縁部上面を平坦に整形し外面がひさし状に突き出るもので、縄文のみの施文である。10は、口縁部上端に斜縄文施文した隆帯を巡らし、その下に平行沈線間に刺突列、磨り消し部、沈線を施したものである。縄文時代後期に相当するものと考えられる。11は、縄文施文後に縦位の撚糸圧痕文を施すもの。12～18は、G 3グリッドから出土したもので、12は、口縁部が外反するもので10と同じく口縁部上端に斜縄文を施文した隆帯を巡らす以外は無文となる。縄文時代後期に伴うものと思われる。13～16は、縄文以外に施文技法を持たないもの。19、21～25は、G 5グリッドから出土したもので、19は、木目状撚糸文となるものか。21、25は、胎土中に植物繊維を含む縄文時代前期のものである。21、25は、同一個体となるものと考えられる。22～24は、無文のもので比較的薄手の土器片である。

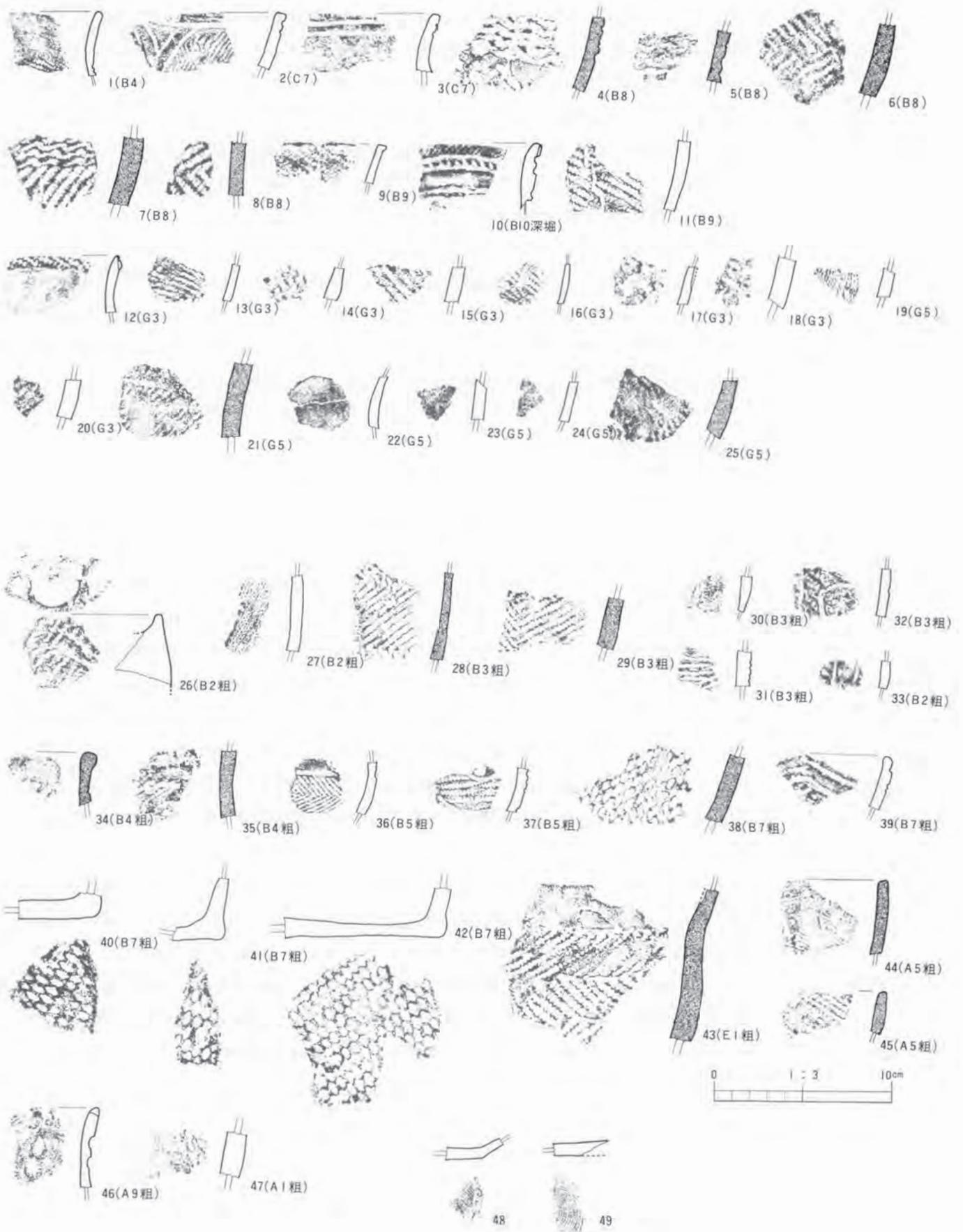
⑤ 粗掘り段階の出土遺物（第10図26～47）

基本層序の1～2層中より出土したと考えられるもの。

26、27は、B 2グリッドから出土した。26は、肥厚した口縁部片で内面が剥落している。口縁上面には円状～楕円形状の区画がみられ、口縁部上端には縄文施文後に原体圧痕文を波状に施している。縄文時代中期に相当するものと思われる。27は、木目状撚糸文を施文したものでか。28～33は、B 3グリッドより出土したものである。28、29とも、羽状縄文を施文するもので植物繊維の混入が認められるもの。30、31は、原体圧痕文を施文するもの。32、33は、沈線を施文するもので、32は方形状に区画する沈線か。33は、沈線間を磨消している。34、35は、B 4グリッド出土で胎土中に植物繊維を含むもの。34は、口縁部上端が肥厚する。35は、縄文施文



第9図 金浜Ⅰ遺跡出土遺物 ③



第10図 金浜Ⅰ遺跡出土遺物 ④

後に撚糸圧痕文を施文している。36、37は、B 5 グリッド出土のもの。36は、第7図31（B 7 グリッド上層出土のもの）と類似するもの。磨消し部と沈線が施文され、細かい原体の縄文を回転方向を変えて施文している。縄文時代後期に相当するものと思われる。37も沈線間に縄文を施文するもので、やはり縄文時代後期のものか。38～42は、B 7 グリッドから出土したもの。38は、胎土に植物繊維の混入するもので、所謂、びっちり縄文を施文する縄文時代前期初頭のものである。39は、波状口縁となるもので、縄文施文後に波状に沈線を施すもの。縄文時代中期に伴うものか。40～42は底部の破片で同一個体のものである。底面に網代痕が認められるもので、底部から胴部の立ち上がりがほぼ直に近いか。43は、E 1 グリッド出土のもので、胎土中に植物繊維を多量に含む。おそらく口縁部直下の破片と考えられるが、整然とした羽状縄文を施文するもので、縄文時代前期初頭に伴うものと思われる。44、45は、A 5 グリッド出土のもの。43同様植物繊維を含む前期のものと思われる。どちらも口縁部上面を平坦に整形する縄文のみの施文である。46は、A 9 グリッド出土。波状口縁となるもので刺突文が施されている。縄文時代後期に所属するものか。47は、A 1 グリッド出土のものである。

縄文時代の石器（第11図）

今回の調査により出土した石器は極めて少なく、図示できたのは第11図の7点だけである。なお、石器とは認定できない剥片や礫片は若干量出土しているが、あえて図示はしなかった。以下、石器について記す。

石鏃

第11図1は、E 7 グリッドから出土した石鏃である。形態的には、平基の二等辺三角形を呈するものである。最大長2.4cm、最大幅1.3cm、最大厚0.4cm、重量1.3gをはかる。両面とも第1次剥離面を残す。2は、G 3 グリッド出土の石鏃。1と同じく平基の二等辺三角形を呈する。片面にのみ第1次剥離面を残すもの。全長2.2cm、最大幅1.4cm、最大厚0.4cm、重量0.9gをはかる。3は、出土地点不明の石鏃の欠損品。やや不整ながら平基の二等辺三角形を呈するものである。残存長1.8cm、最大幅1.4cm、最大厚0.4cm、重量0.7gをはかる。4は、G 5

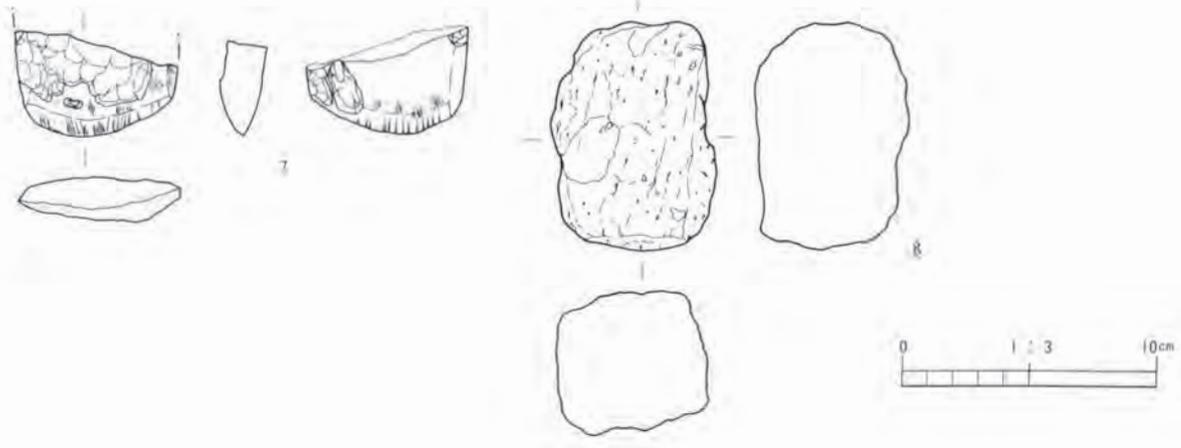
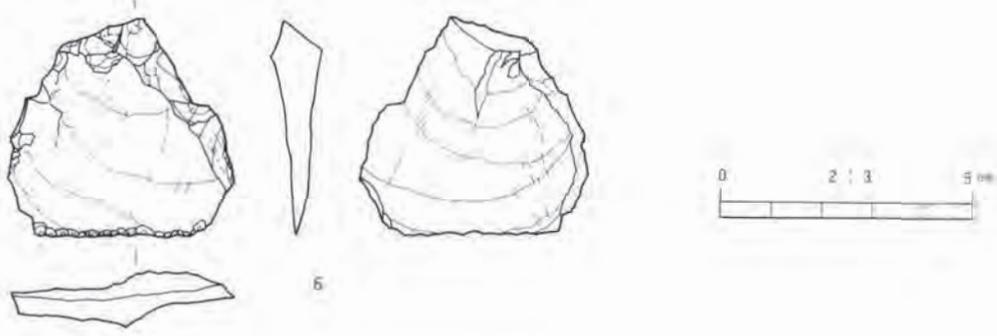
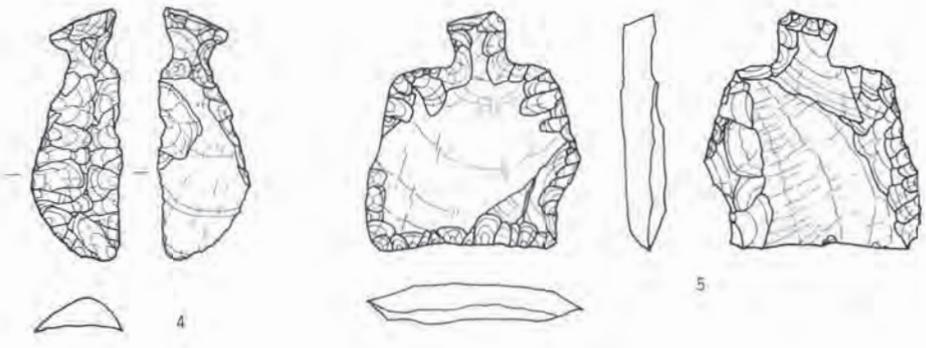
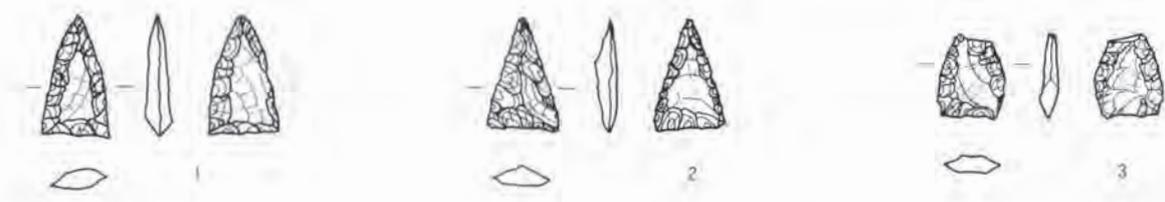
石匙

グリッド出土の縦形石匙。つまみ部分が主軸線に対し左側に傾き一方の側縁が湾曲する。裏面にはつまみ部分付近以外には剥離を施さず片刃状の刃部を作り出している。全長5cm、最大幅1.8cm、最大厚0.6cm、重量6.0gをはかる。5は、刃部がほぼ正形状を呈する石匙である。つまみ部分は主軸方向に対し平行するもので、両側縁は両側から、下端部は一方だけの剥離で刃部を形成している。全長4.7cm、最大幅4.3cm、最大厚0.8cm、重量13.8gをはかる。6は、台形状の剥片の下端部に片刃の刃部をつけたスクレイパーである。刃部の剥離は細かい。全長4.4

磨製石斧

cm、最大幅4.5cm、最大厚1.2cm、重量12.4gをはかる。7は、磨製石斧の欠損品。欠損時の剥離が大きく残る。刃部には使用によると思われる沈線状の擦痕が認められる。8は、B10グリッドの深掘りにより出土した軽石である。特別に加工したような痕跡は認められない。全長9.1cm、最大幅6.2cm、最大厚5.3cm、重量73gをはかる。

軽石



第11図 金浜 I 遺跡出土遺物 ⑤

4-(2) 縄文時代以外の遺物

縄文時代以外の遺物としては、平安時代の土師器、須恵器のほか、鉄製品、鉄滓、陶磁器片があるが、図示できたのは須恵器と鉄製品のみである。

須恵器

第10図48、49は、須恵器坏の底部片である。底部の切離しは、どちらも回転糸切りで無調整である。図示できたのはこの2点のみであったが、他には、内面黒色処理を施した坏の破片や土師器甕の体部片が出土している。

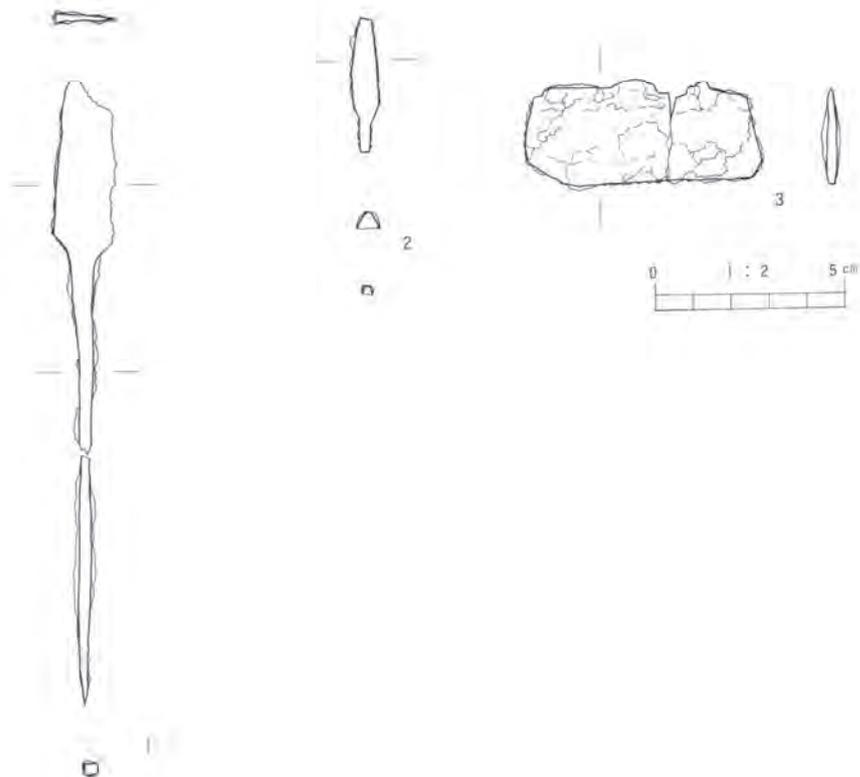
土師器

第12図1～3は、B7グリッドから出土した鉄製品である。検出遺構で記している焼土の広がり直上から出土したものである。

鉄鏃

1は残存長36.6cmをはかる鉄鏃と思われる。根先の一方の側縁部は欠損しており、断面が三角形状になっている。先端は欠損。2も同様に鉄鏃と思われる破損品だが、1よりは、肉厚である。3は、鏃の破損品と思われる平らな板状のものである。

鏃



第12図 金浜I遺跡出土遺物 ⑥

Ⅳ 調査のまとめ

以上が、金浜Ⅰ遺跡の調査の結果である。発掘調査実施以来、実に9年ぶりに報告となってしまった。しかも、調査区全体図をはじめとし、遺構などの図面を作成していなかったなど不備な点が指摘され弁解の余地がない。ということで、遺物を中心に記しまとめとする。

1 縄文時代の遺物について

今回の調査により出土した土器は、早期から晩期までの各期のものが含まれている。以下、簡単に時期毎にまとめてみる。

Ⅰ群土器 縄文時代早期に属する土器群を一括したもので、次の各類に細分される。

A類 (第8図35~37)

A類

微隆起線文を施文するもの。箸状の棒状工具を用い沈線を引くことにより生じる粘土のまくれあがり微隆起線を表土している。関東方面の野鳥式といわれるものに相当するものである。宮古市内では、鍛ヶ崎館山貝塚より比較的まとまって出土しているが、それらに比較しても、胎土、焼成が良い様である。他例では、二戸市上里遺跡(細隆起線文としている)や青森県八戸市売場遺跡などで出土している。

B類 (第7図2)

B類

条痕文を施すもので、薄手の土器である。この1点だけのため詳細は不明。市内では鍛ヶ崎館山貝塚から出土している。

C類 (第7図1)

C類

貝殻文により施文されるもの。今回の調査では、この一点だけで有り詳細は不明である。市内ではやはり鍛ヶ崎館山貝塚から出土している。

D類 (第8図1~34)

D類

表裏に縄文を施文する縄文-縄文土器。市内では、千鷲遺跡や鍛ヶ崎館山貝塚などから出土しているが、胎土中の植物繊維の含有量などに差異が認められる。

Ⅱ群土器 縄文時代前期に所属する土器群

施文要素や技法などの違いにより分類でき、大半は前期のうちでも初頭期のものと考えられる。当該期の遺物については、昭和62年(1988)に調査した千鷲遺跡より大量に出土しており、その際に土器の分類を試みているので、その分類を基に金浜Ⅰ遺跡出土のものも分類する。

A類 (第9図1、26、第10図43)

A類

千鷲Ⅱ群D類b種に相当するもので、結束しない整然とした羽状縄文を施文する。口縁部の破片がないので不明だが、千鷲Ⅱ群C類C種となる可能性も有る。

B類 (第9図4、28、第10図6、8、28、29)

B類

千鷲Ⅲ群A類に相当するもの。節径の小さい細かい原体で羽状縄文を施文するもの。回転方向を変えて羽状に展開するものも含めた。

C類 (第9図6、10、11、第10図38)

C類

D類	千鷄Ⅲ群B類に相当するもので、所謂、びっちり縄文を施文するもの。 D類（第9図12、15、17）
E類	千鷄Ⅳ群A類に相当するもので、撚糸文を施文するもの。 E類（第8図3、第9図25、27、第10図4、5、7、35）
F類	千鷄Ⅳ群F類に相当するもので、不整撚糸文を施文するもの。 F類（第9図3）
G類	千鷄Ⅳ群G類に相当するもので、S字状連鎖沈文を施文するもの。 G類（第8図4、7～9、13、15、16、第9図2、14、35～41、第10図21、25、44、45） 縄文以外の施文要素を持たないもので、胎土中に植物繊維を含むもの。 以上のA類～G類のうち、千鷄遺跡ではA類とB、C類は時期差があり、また、層位的にも区分できるものであった。今回の調査では、層位的なものが不明であるため分類のみに留めておく。

Ⅲ群土器 縄文時代中期に所属する土器群（第8図20～29、第9図6、7、22～24、第10図26、29）
今回の調査では出土量も少なく、また、時期的にもまとまった様相を呈していないため中期に所属する土器として一括したが、この中でも第8図21、第9図6、7、第10図26などは中期の中でも古い方に、そして第8図29などは中期でも新しい方と時期にもかなり差があるものである。

Ⅳ群土器 縄文時代後期に所属する土器群（第7図30～33、第9図72～74、第10図2）
今回の調査で出土したものは、すべて沈線と磨消し技法による帯縄文で文様を展開するものである。全容を把握できるものがなく不明確だが、後期中葉に相当するものと考えられる。

Ⅴ群土器 縄文時代晩期に所属する土器群（第10図3、10）
2点のみの出土で詳細は不明である。

以上の土器の分類は、あくまでも土器片そのもののもつ文様要素、技法、胎土などに基づくものであり、層位的な根拠や遺構との関係などの状況的なものは全く加味していない。

2 縄文時代以外の遺物

量的にも少なく、平安時代に所属すると思われる土師器、須恵器の他、鉄鏃等が出土しているが、鉄鏃などは、市内においては、磯鷄館山遺跡、狐崎遺跡で若干出土している程度で、市内においては、出土例が少ないものである。

3 調査のまとめ

調査後、9年ぶりの報告となったが、現場での記録の不備、遺物保管上の問題点など多々反省すべき点が多かった。ただただ遺物の列挙となった点はいなめず、遺跡の内容にまで言及しえなかった。

大 付 遺 跡

I 調査経過

1 大付遺跡について

大付遺跡は、宮古市遺跡コードL G14-2291、岩手県遺跡コードL G04-2291として登録されている周知の遺跡である。当遺跡は、明治末年頃から骨角器や貝・獣魚骨類の自然遺物を出土する貝塚として知られており、大付遺跡というよりは大付貝塚として紹介されている事の方が多い様である。例えば、古くは、明治44年(1911)に刊行された岸上鎌吉(註1)の名著『Pre historic Fishing in Japan』(註2)にも紹介され、全国的にも知られるようになった。この岸上の書刊行に際しては、地元の研究家であった中嶋吉兵衛(註3)による資料提供などの協力があったものである。

周知の遺跡
貝塚

中嶋吉兵衛

大正13年(1924)には、当時内務省の考査員であった柴田常恵が岩手県史跡名勝天然記念物調査会委員であった小田島禄郎の案内で来宮し、大付遺跡の発掘調査を実施している。この柴田の来県・来宮は、史跡指定候補を選定するためのものであり宮古には3日間滞在している。大付遺跡もその候補地のひとつであったが、調査の結果、貝層が思っていた以上に薄かったということで残念ながら指定候補物件としては見送られている。なお、この来宮の際には磯鶏蝦夷森貝塚、楯ヶ崎館山貝塚の発掘も行っており、更には新発見の貝塚(崎山貝塚と考えられる)の方に興味を示しているが、調査にまでは至らなかった様である。

その後、昭和初期から戦前・戦後にかけては目立った活動もなく、むしろ古くからの集落であった大付地区の宅地化や家屋の改築が進行していった。この様な状況の中、昭和53、54年(1978、79)には、個人住宅建築に先だつ緊急発掘調査並びに範囲確認調査が岩手県立博物館の学芸員であった小田野哲憲、熊谷常正両氏に依頼して実施されている。(大付遺跡第1次、第2次調査)。調査の結果、縄文時代晩期の屈葬人骨1体をはじめとする縄文時代の遺物や堅穴住居跡などの遺構が検出されており、『大付報文79』が刊行されている。

大付報文79

これ以後、大付遺跡では個人住宅建築や市道改良工事などに伴う小規模な調査が断続的に行なわれている。

(註1) 当時、東京帝国大学農科大学教授で、史前史漁業の研究の資料収集目的に来宮・来跡している。

(註2) 岩手県立博物館の小田野哲憲、川村和子両氏による克明な訳本がある。『岩手県立博物館研究報告』第2号、3号(1984、85)収録の「岸上鎌吉 日本先史時代の漁撈(1)、(2)」

(註3) 中嶋の活躍は、各書で紹介されているが、氏は、楯ヶ崎館山貝塚などの発掘を試みてより、『先史遺物帖』などの文献記録を残している。現物は、子息である中嶋隆氏が保管している。

(註4) 岩手日報新聞1924(大正13年)記事「東海岸の史蹟踏査」(小田島禄郎)による

(註5) 註4に同じ

2 調査に至る経過

今回の調査は、平成元年（1989）に自己住宅建築に伴う農地転用許可に係る届出に基づき、当該地が周知の遺跡である大付遺跡の範囲内であることに端を発した。宮古市教育委員会では、前述理由のため、申請者に通知し事前の協議を開始した。協議の結果、遺跡の破壊がまぬがれない部分（住宅建設部分）について緊急に発掘調査を実施することとし、宮古市教育委員会では、平成2年度に必要経費を予算化し調査に至った。

なお、整理作業、報告書作成・刊行については、平成3年度に予算化し実施した。その際、過去の未報告調査であった金浜I遺跡と併せて報告書として刊行することとなった。

3 調査要旨

調査地点 宮古市崎楯ヶ崎第15地割17番地3

調査原因 個人住宅建築工事に先だつ調査（申請者 佐々木正人）

調査面積 155.5㎡

調査期間 <野外調査期間> 平成2年7月16日～同年8月1日

<室内作業期間> 平成3年11月1日～平成4年3月31日

検出遺構 縄文時代後期末と考えられる土壇跡（墓壇？）1基のほか、柱穴状の小ピット群を検出したが、削平などによる攪乱が著しく、いずれも浅いものであった。

検出遺物 土壇跡より縄文時代後期末の土器が1点出土したほか、石皿などの礫石器類を出土しているが量的には少なかった。

4 調査体制

発掘調査の体制は以下の通りである。

調査主体 宮古教育委員会（教育長 佐藤勇逸）

調査総括 宮古教育委員会社会教育課長 大森 翼

事務総括 宮古教育委員会社会教育係長 小本 哲

事務担当 宮古教育委員会社会教育課主任 坂下 昇

調査担当 宮古教育委員会社会教育係主事 高橋憲太郎

〃 主事 鎌田 祐二（主担当）

〃 主事 鶴田 均

発掘調査に際しては、次の各位より多大なるご協力を頂いた。（敬称略、順不同）

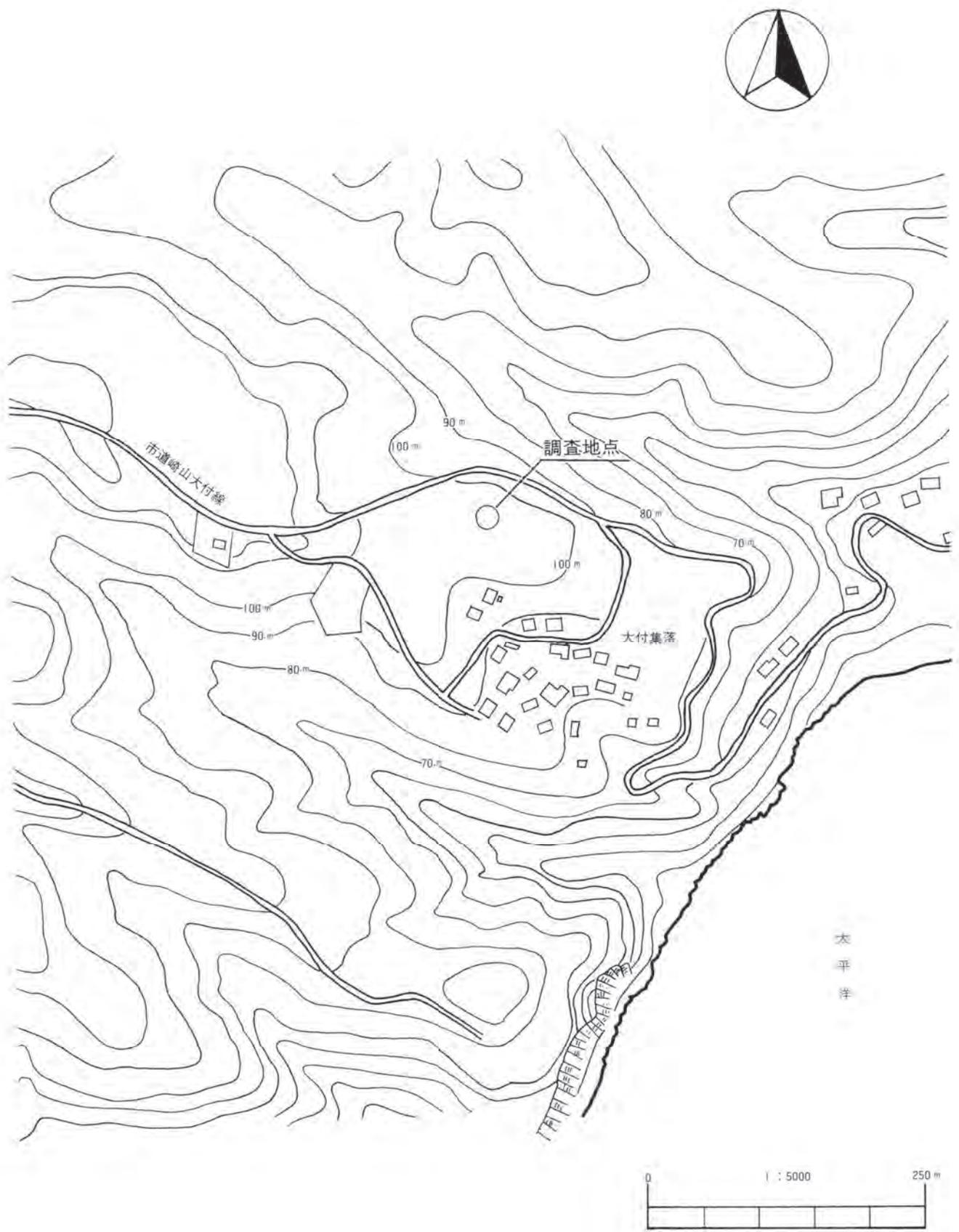
<地権者> 佐々木正人

<発掘調査> 古館友三、佐々木茂、刈屋昭三、北村忠治、木村博、伊藤晴男

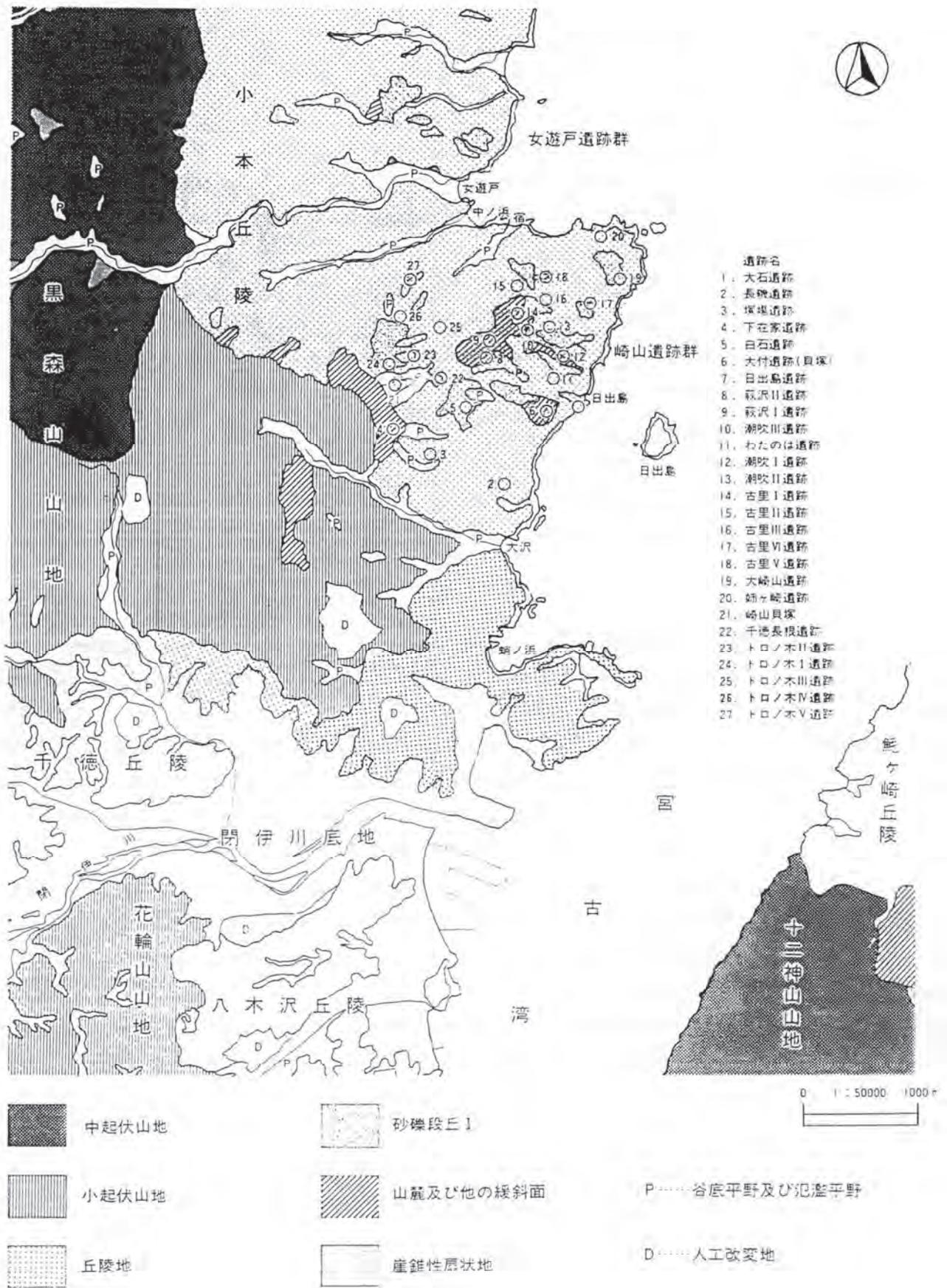
<整理作業> 佐々木ヨシ子、山野目崇子



第13図 大付遺跡と周辺の遺跡



第14図 大付遺跡周辺地形図



第15図 大付遺跡周辺地形分類図

II 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の位置と立地

大付遺跡は、宮古市中心部市街地より北効に位置する崎山地区に所在し、北上山地に源を發する閉伊川の河口にある宮古市役所より直線距離で約4.5km北東の地点に位置する。

崎山遺跡群

当遺跡は、太平洋に三角形に張り出す崎山地区の中でも東側の海岸部側に在り、崎山地区に存在する28ヶ所の遺跡で構成する崎山遺跡群のひとつとして把握されている。過去に実施された調査や分布調査などの結果によれば、当遺跡からは縄文時代早期末から前期前半、中期中葉、後期から晩期にかけての遺物が出土しており、ほぼ縄文時代全般にわたり人々の活動の拠点となっていたものと考えられる。

さて、当遺跡は、崎山地区西側に広がる中～小起伏山地帯により高度的には完全に区切られており、その山地帯から続く緩斜面や尾根、砂礫段丘などに遺跡が立地する崎山遺跡群内の遺跡と同様の立地・環境にあったものである。その中でも大付遺跡は、ゆるやかに海側へ傾斜する緩斜面上に立地しており、遺跡の東は海、北、南は深い谷により囲まれている。遺跡の西側は、標高およそ130mで徐々に高度を下げながら標高70m付近から急激に落ち込み、この付近が東側の境界となるものであろう。標高100～80mあたりの緩斜面部分が遺跡の中心部になるものと思われる。今回の調査地点は、この遺跡の中心部分に相当する標高約100m付近にあたる場所であった。

2 大付遺跡と周辺の遺跡

大付遺跡を含む崎山遺跡群については、『分布調査1』、『分布図86』、『崎山遺跡群Ⅰ～Ⅴ』、『トロノ木Ⅰ』などで詳述されているため、ここでは主な遺跡についてのみ記す。

わたのは遺跡

わたのは遺跡 大付遺跡と沢をはさんだ北側の台地上に立地し、大付遺跡と似た様な立地環境にある。古くからその存在が知られており、前述した中嶋吉兵衛により遺物が収集されており『先史遺物帖』にも「わたのは」発見の石剣の拓影図が掲載されている。遺跡の現況は畑地となっており遺物の散布密度も非常に濃く保存状況もよいものである。

白石遺跡

白石遺跡 大付遺跡と深い沢筋をはさんだ西南の台地上に立地している。昭和60年代頃より遺跡の中心部と思われる範囲での個人住宅建築等に先だつ緊急発掘調査が実施されており、縄文時代中期末から後期初頭にかけての複式竈をもつ竪穴住居跡やそれらに伴う多種多様の遺物が出土している。

崎山貝塚

崎山貝塚 崎山遺跡群の中でも最も保存状況が良く大規模な貝塚を伴う集落跡である。昭和62年度から範囲確認調査を実施しており、その集落構造や貝層の状況などが明らかになって来ている。縄文時代中期の集落跡とそれと同時期の貝層や縄文前期の貝層、立石などが確認されている。

その他崎山遺跡群内には28ヶ所もの大～小規模の遺跡が存在しており、しかも、縄文時代早期～晩期までの遺跡があり、まさに縄文時代の歩みがみてとれるものである。

Ⅲ 調査内容

No.	形状	規模 (m)	深さ
P 1	円形	0.24×0.23	0.08
P 2	円形	0.22×0.20	0.15
P 3	だ円形	0.30×0.26	0.11
P 4	円形	0.25×0.25	0.07
P 5	円形	0.25×0.27	0.14
P 6	円形	0.21×0.20	0.16
P 7	円形	0.22×0.20	0.14
P 8	円形	0.21×0.20	0.14
P 9	円形	0.22×0.20	0.09
P 10	円形	0.24×0.22	0.07
P 11	円形	0.21×0.21	0.11
P 12	円形	0.20×0.20	0.08
P 13	だ円形	0.26×0.22	0.15
P 14	だ円形	0.24×0.20	0.07
P 15	円形	0.20×0.18	0.13
P 16	だ円形	0.14×0.10	0.05
P 17	円形	0.19×0.18	0.03
P 18	円形	0.27×0.26	0.25
P 19	円形	0.17×0.16	0.04
P 20	だ円形	0.20×0.17	0.09
P 21	円形	0.27×0.27	0.10
P 22	円形	0.21×0.20	0.05
P 23	だ円形	0.34×0.30	0.43
P 24	だ円形	0.30×0.22	0.11
P 25	だ円形	0.23×0.20	0.11
P 26	円形	0.15×0.15	0.04
P 27	だ円形	0.25×0.17	0.11
P 28	だ円形	0.23×0.19	0.12
P 29	円形	0.21×0.19	0.05
P 30	だ円形	0.34×0.20	0.03
P 31	だ円形	0.19×0.16	0.04
P 32	円形	0.23×0.20	0.18
P 33	だ円形	0.21×0.19	0.04
P 34	円形	0.16×0.16	0.05
P 35	円形	0.23×0.22	0.10
P 36	円形	0.22×0.20	0.08
P 37	だ円形	0.41×0.35	0.15
P 38	だ円形	0.62×0.32	0.05
P 39	だ円形	0.46×0.32	0.07
P 40	だ円形	1.15×0.70	0.06
P 41	円形	0.25×0.22	0.08
P 42	円形	0.22×0.20	0.03
P 43	円形	0.20×0.29	0.05
P 44	だ円形	0.35×0.25	0.07
P 45	円形	0.35×0.25	0.06
P 46	円形	0.30×0.25	0.04
P 47	円形	0.30×0.28	0.04
P 48	円形	0.22×0.20	0.04
P 49	円形	0.34×0.32	0.07
P 50	円形	0.32×0.31	0.18

第1表 小ピット群計測値一覧表

1 遺跡の現況

大付遺跡の現況は、前章でも簡単に触れたが古くから集落が形成されていたためかなりの部分に人工的な手が加わっており、特に標高100m前後の遺跡の中心部と思われ、自然遺物包含層が存在するだろうと目されている地点などでは、宅地化が顕著である。ただ、この中心部より西側の地点では畑地や山林、雑種地として比較的遺跡の保存状況は良好となっているが、やはり宅地化や道路改良工事などの開発の波が押し寄せている。また、このような開発とは別に漁具置場や乾燥場として整地されている所もあり、遺跡の保存状況としては全体的に良好といえる状態ではない。

今回の調査地点も、宅地に隣接して残されていた畑地である。今後は、この様にわずかに残されている畑地や家屋改築に伴う発掘調査の実施などの保護対策が急務になっていくものと思われる。

2 検出した遺構・遺物

小ピット群（第16～17図、写真図版）

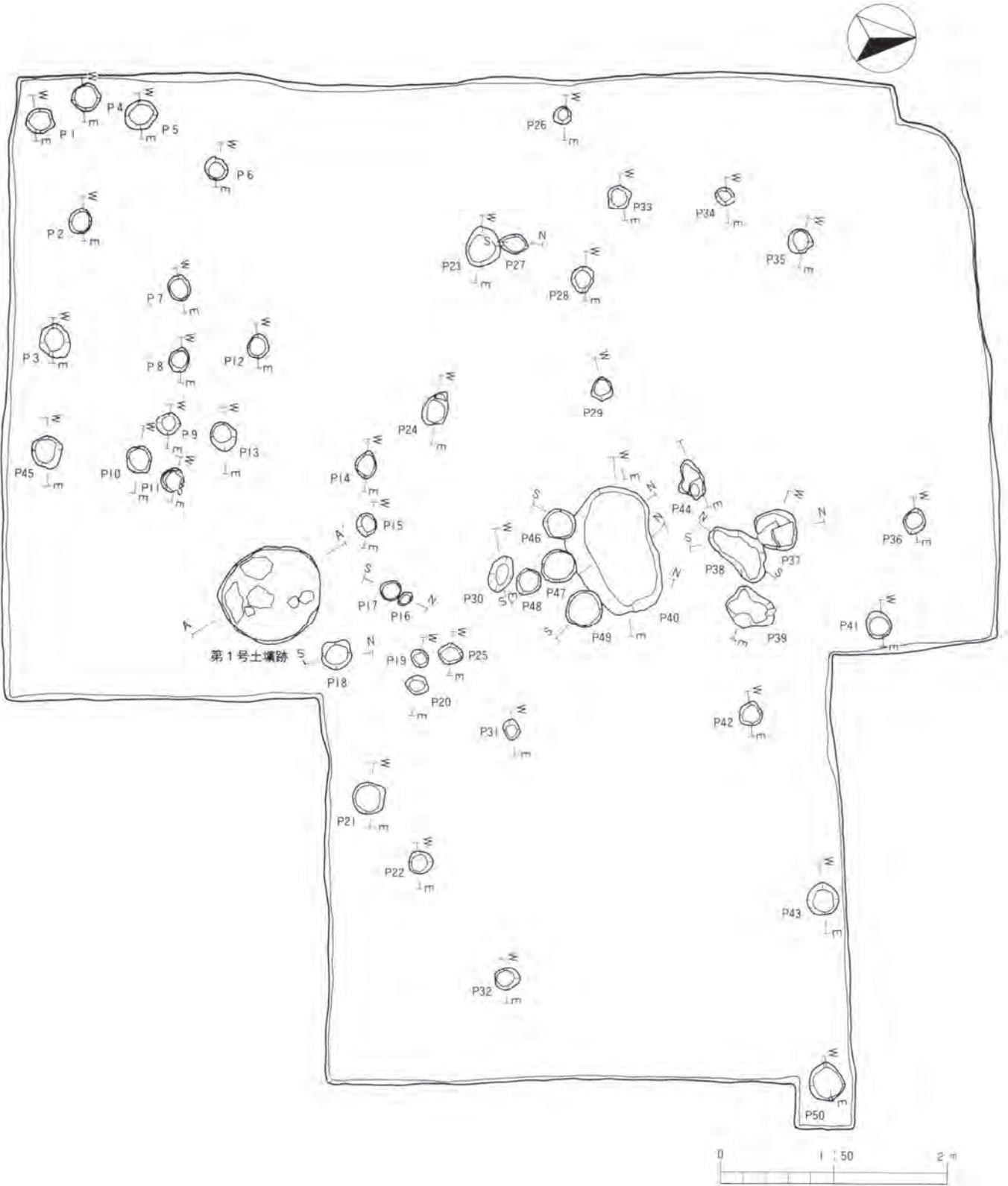
ほぼ調査区の全域に検出しているが、表土が薄いうえに表土下がすぐ地山面となっており、中には攪乱によるものもあると考えられる。左側に小ピット群の形状・規模などの一覧表を掲げており個々の詳述は行なわない。

柱痕跡が明確に確認されたものはなかったが、中には堅穴住居跡などに伴う柱穴となるものもあると考えられる。

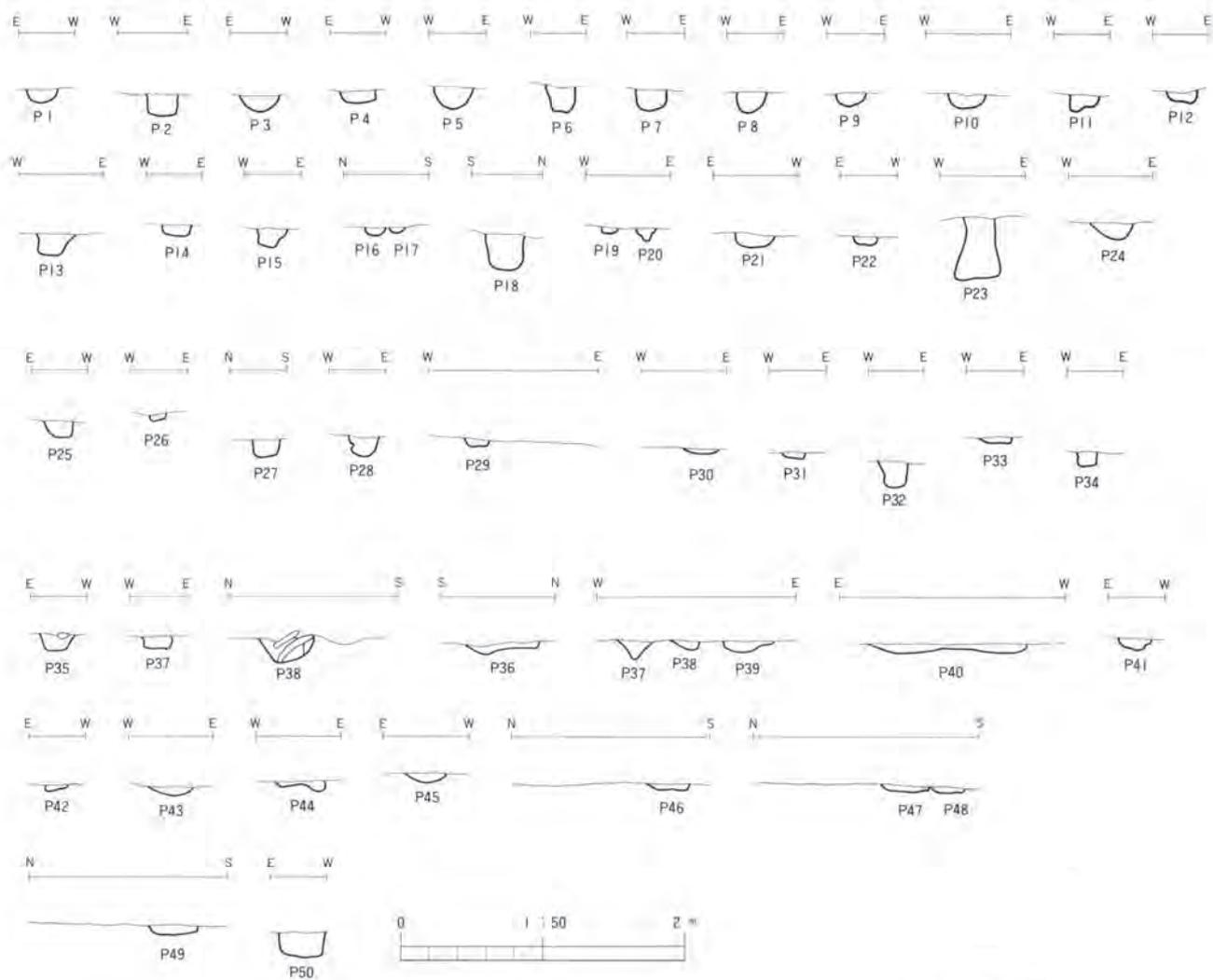
小ピットの埋土からの出土遺物はほとんどなく、図示できるものはP47から出土した1点（第20図の5）のみであるが、これも縄文主体の土器片で時期を特定できるものではない。

ここでは、後述する第1号土壙跡以外から出土した遺物（石器）について記述する。

第20図1～3は、いずれも表土中からのもので1は、台形状の剥片を利用した削搔器の類と思わ



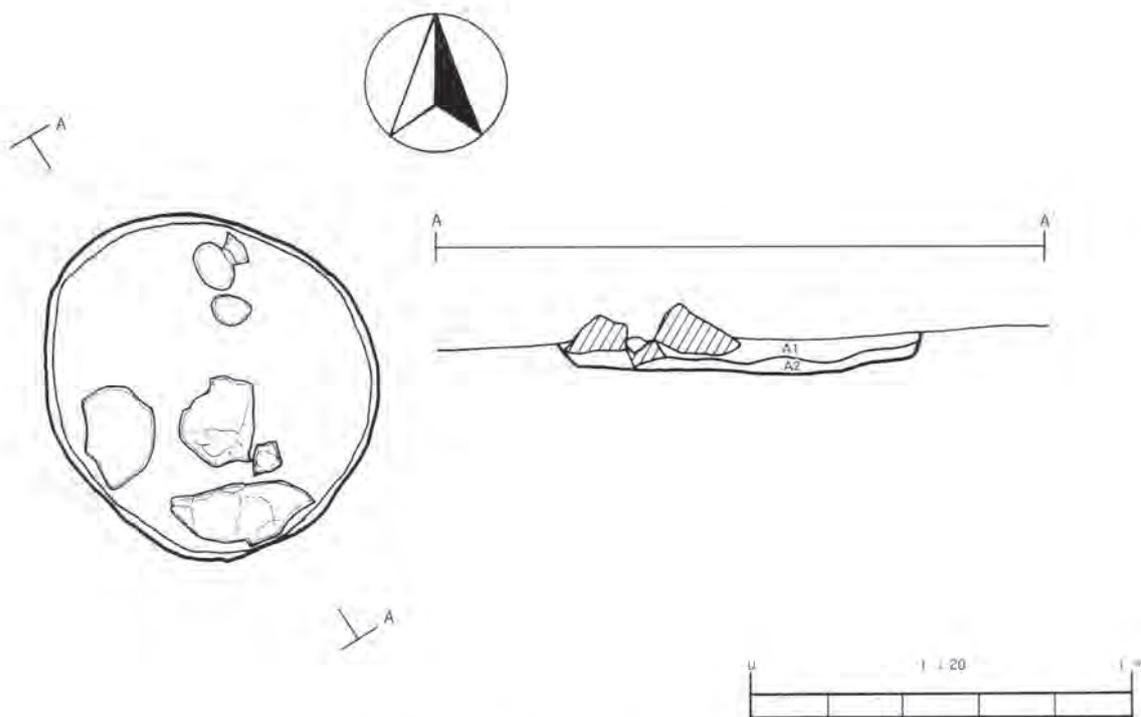
第16図 大付遺跡調査区全体図



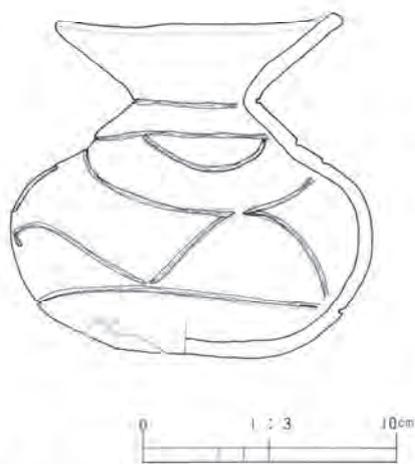
第17図 大付遺跡小ピット群断面図

れる。切折部と反対側縁部に細かい剥離で刃部を形成している。裏面は、ほとんどが大剥離を加えたままである。2、3は礫を利用した礫石器。2は楕円形礫を縦長に半割し湾曲する面のほぼ中央部に敲打痕が認められるもの。3は、断面が円形状を呈する斧状の石器である。側面部や下端部に成形によるものと考えられる敲打痕が確認され、石斧の作成を目ざした加工品と思われる。石質は砂岩系のもろいものである。

その他、図示はしなかったが、ピットの埋土や表土中から使用痕や加工痕を持たない扁平礫が10数点出土している。



第18図 大付遺跡第1号土坑跡



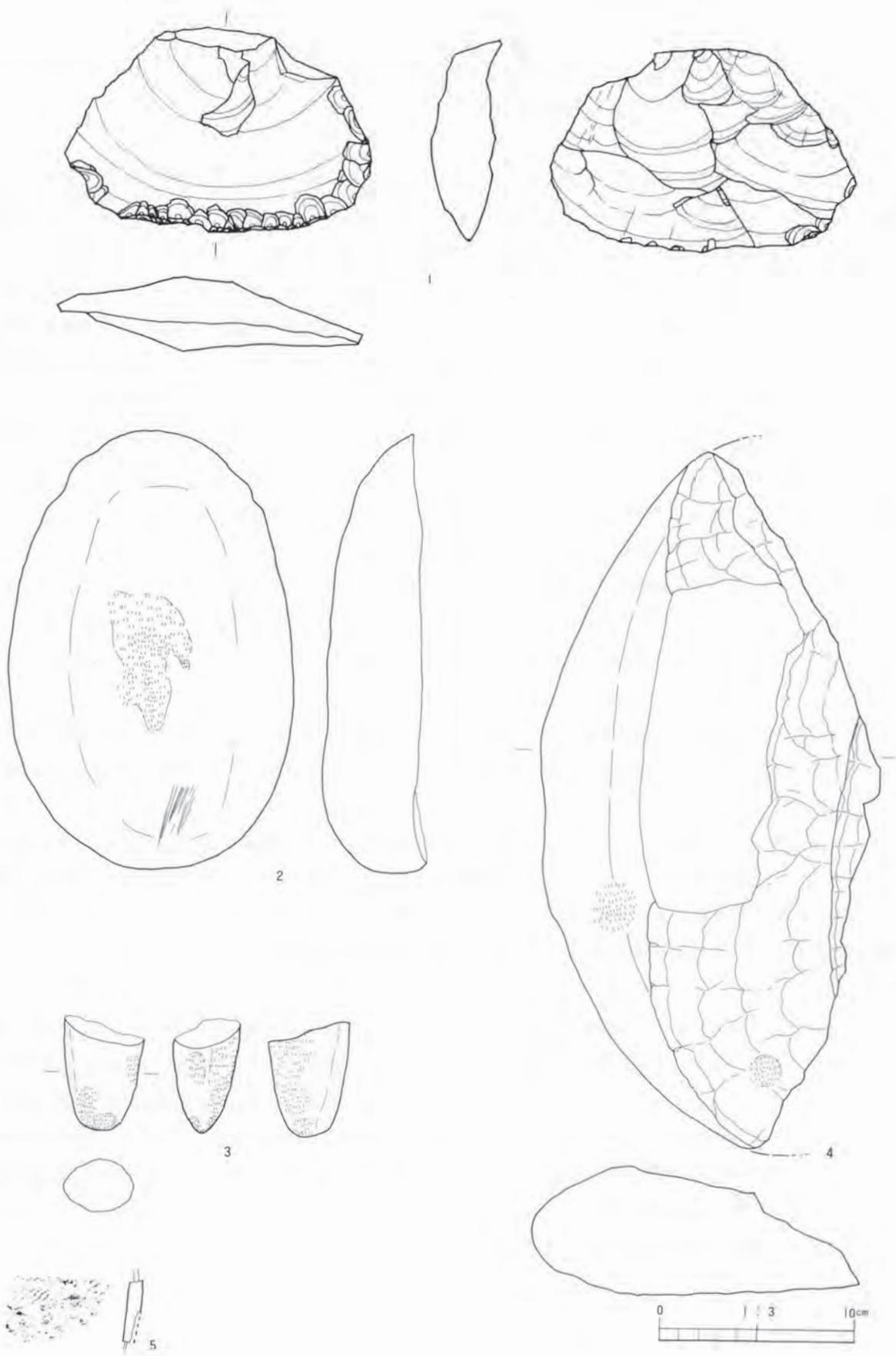
第19図 大付遺跡第1号土坑跡出土土器

第1号土坑跡（第18図、写真図版）

調査区の南東側に検出した。0.95×0.85m、深さ0.1mをはかるほぼ円形プランを呈する。わずかに残っている壁は、ほぼ直に立ち上がる。埋土は、A層から成りA1、A2層に細分される。ともに暗褐色から褐色に近い土を基本とするもので、固さ、しまりはともに欠く。A1層中には、第18図の様に大礫（そのうち1点は石皿の欠損品）や土器が包含する。底面は、ほぼ平坦面となる。

遺物は、土器1点と石皿が出土している。第19図は、土坑跡のほぼ北側の壁近くより出土した土器で、口縁部が大きく開く壺形の土器である。口径11.0cm、器高13.7cmをはかり、底径は推定で5.4cmとなる。口縁部は無文で頸部以下の胴部に施文される。文様は沈線で半円状の区画をつくり、浮彫り的な文様となる。第20図4は、土器とは反対側の南壁側から出した石皿の欠損品である。多孔質な石材を用いており、中央部に向かってゆるやかに傾斜する研磨面を形成している。また、自然面及び剥離面に小さな範囲だが敲打による凹みが認められる。裏面は自然面をそのまま残す。

土坑跡内の他の礫は、使用痕や加工痕などは全く認められないものである。



第20図 大付遺跡出土石器

Ⅳ 調査のまとめ

今回の調査は、わずか155.5㎡の発掘調査であり、しかも調査区全体が削平、整地されており発見された遺構、遺物も少量であった。

柱穴

遺構 検出した遺構としては、多数の柱穴跡と思われる小ピット類と土壙跡1基のみであった。まず、柱穴状のピットであるが、これらは、本文中にも記したが、本来的には竪穴住居跡に伴うものと考えられるが、近年、崎山貝塚の調査でも竪穴住居跡に伴うものか判明しない柱穴跡だけの空間が検出しており（『崎山遺跡群Ⅴ』の地山の落ち込みと東の居住域の間）、単に竪穴住居跡が削平されたものなのか、あるいは、掘立柱建物跡となるのか今後の成果を見守っている所である。今回の大付遺跡の調査で検出したこれらについては、周辺部の調査が為されない限りどの様な性格をもったものかは明らかでないが、今回のこの狭い範囲内だけを見ると、とても掘立柱建物跡を構成する様な配置にはなっておらず、むしろ竪穴住居跡床面で検出する出方に近い様に思われる。

土壙跡

次に、土壙跡である。土器や大礫が伴っている点から墓壙跡である可能性が高いものと考えられる。土器は、土壙内のほぼ北側の壁際に置かれていた。

『大付報文79』で調査された人骨も墓壙内に埋葬されたもの（ただし、その平面形や深さについては不明）であるが、今回の調査した土壙跡とはその立地条件・時期差などの違いがあり一概に比較できないが、やはり土器が伴っている。

遺物 今回の調査においては、ほとんど遺物が出土せず、わずかに第1号土壙跡より壺形の土器1点と礫石器のほか、柱穴状の小ピットより極小片の土器片や剥片石器がわずかに出土しているのみである。

縄文時代後期後葉

土壙跡出土の土器（第19図）は、口縁部が大きく開き頸部でくびれ、胴部が大きく張り出す壺形のものである。文様は、縄文は施文されておらず沈線で半円状の区画を浮き彫りに描いている。注口部が存在していたかは、胴部の半分を欠いており不明である。他に共伴土器がないため期的には断定できないが、縄文時代後期後葉に相当するものと思われる。

以上が、今回の発掘調査のまとめであるが、調査区の保存状況が悪いのと、大付第3次調査でも記している様に当遺跡の場合、標高の高い台地部分の土砂の堆積状況が著しく悪い様である。過去の調査の成果も踏まえると、今回の調査地点よりも南側の緩斜面部を中心に遺構・遺物が存在するようである。しかしながら、今回の様に宅地に隣接して残されたわずかな畑地や空地等の調査の積み重ねが大事なことも明白である。また、次年度には、大付遺跡の西端部付近の道路改良工事に伴う発掘も予定されており、遺跡全体の広がりがどうなっているのか、また、台地頂部の遺構・遺物の在り方などを再検討するには良い機会であるといえる。

写 真 图 版

金浜 I 遺跡（写真図版）

第1図版



金浜Ⅰ遺跡
調査前景観



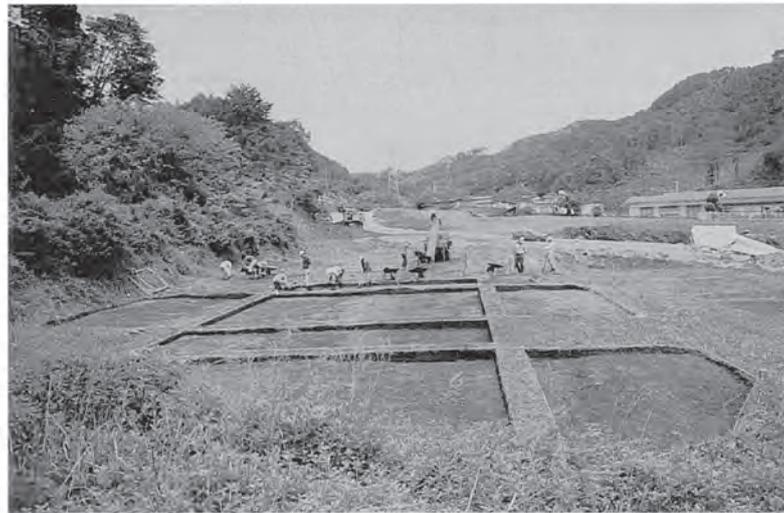
金浜Ⅰ遺跡
調査前景観



金浜Ⅰ遺跡
調査前景観
(近景)

第2図版

調査グリッド
設定状況①



調査グリッド
設定状況②



調査グリッド
設定状況③



第3図版



調査グリッド
設定状況④



調査区グリッド
深掘状況



調査グリッド
設定状況
土層断面

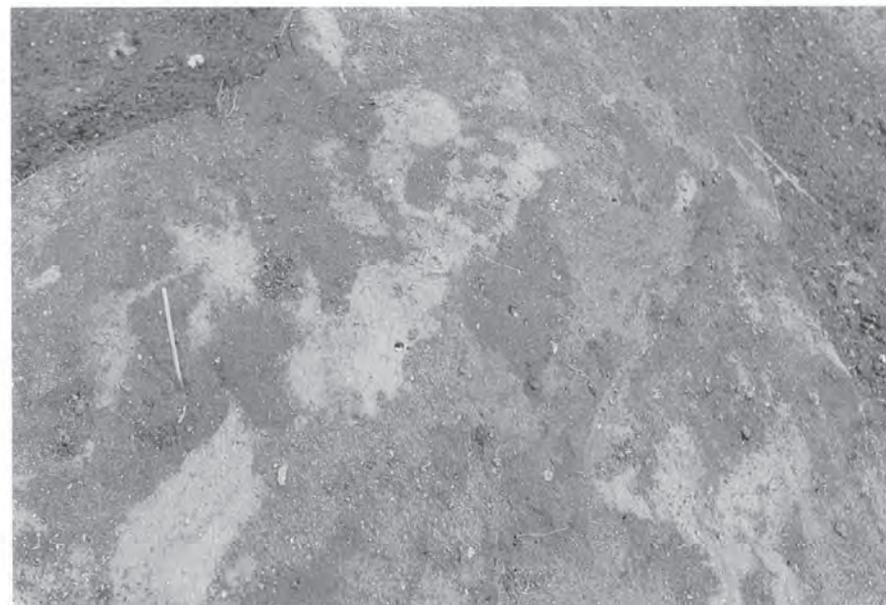
第4図版



柱穴検出状況①

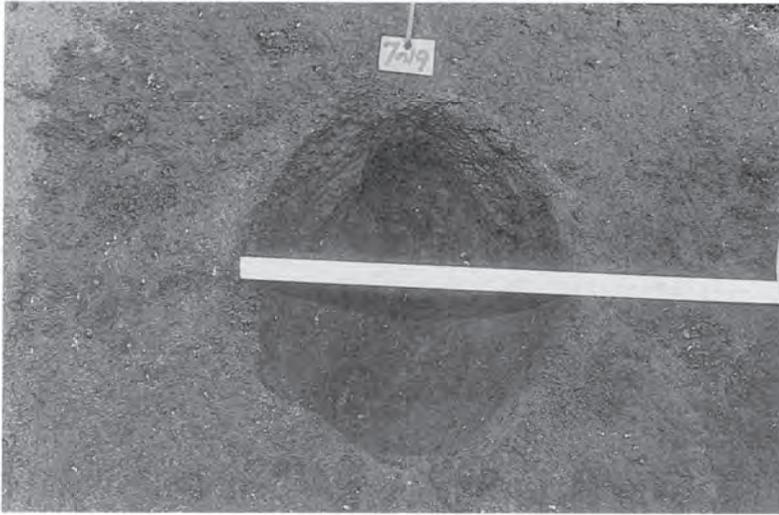


柱穴検出状況②

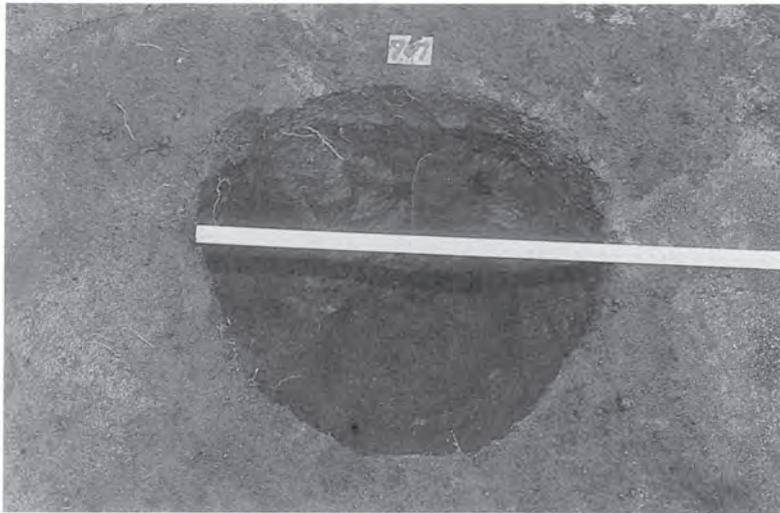


焼土検出状況

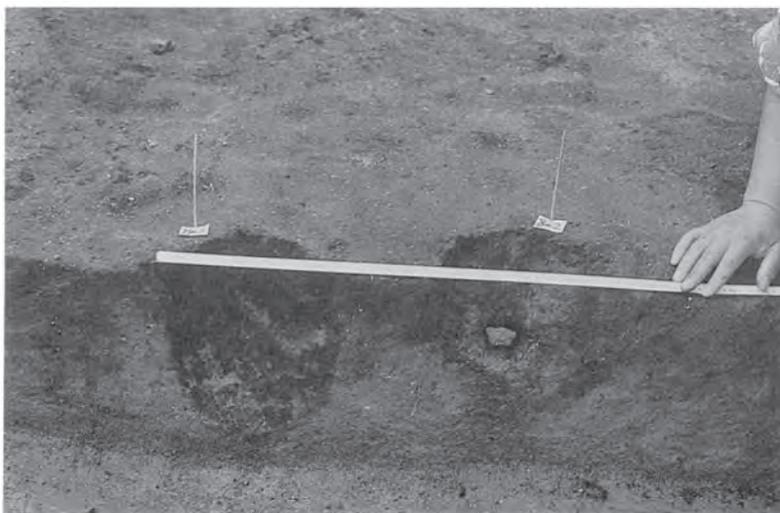
第5図版



柱穴（完掘）



柱穴（完掘）



柱穴（断面）

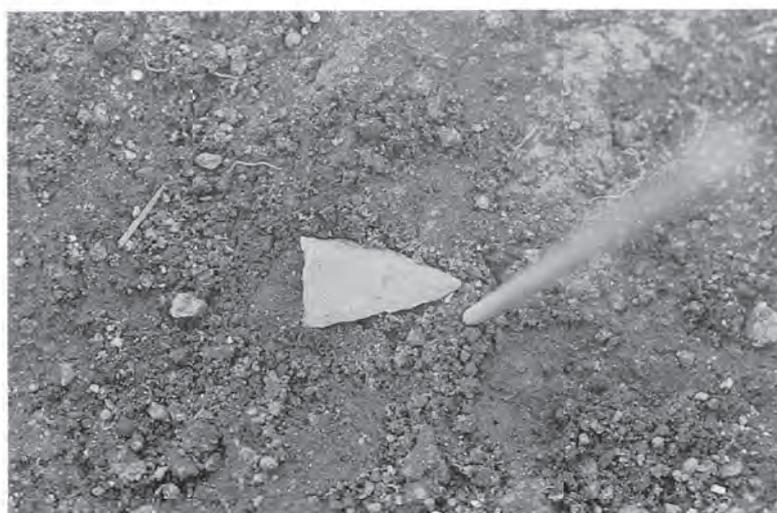
第6図版



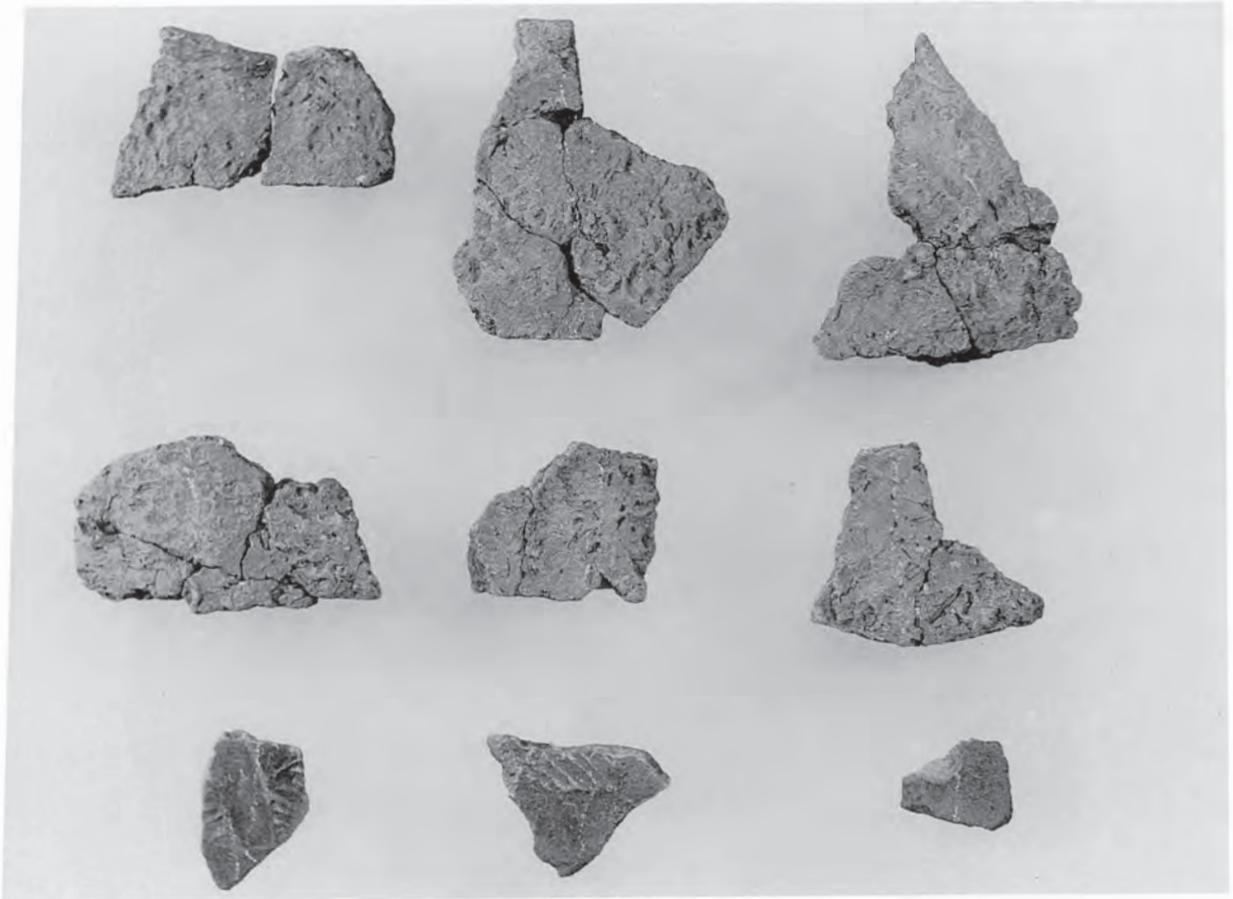
土器片出土状況



土器片及び貝殻
出土状況



石鏃出土状況



出土土器（縄文—縄文土器）



出土土器（裏面）

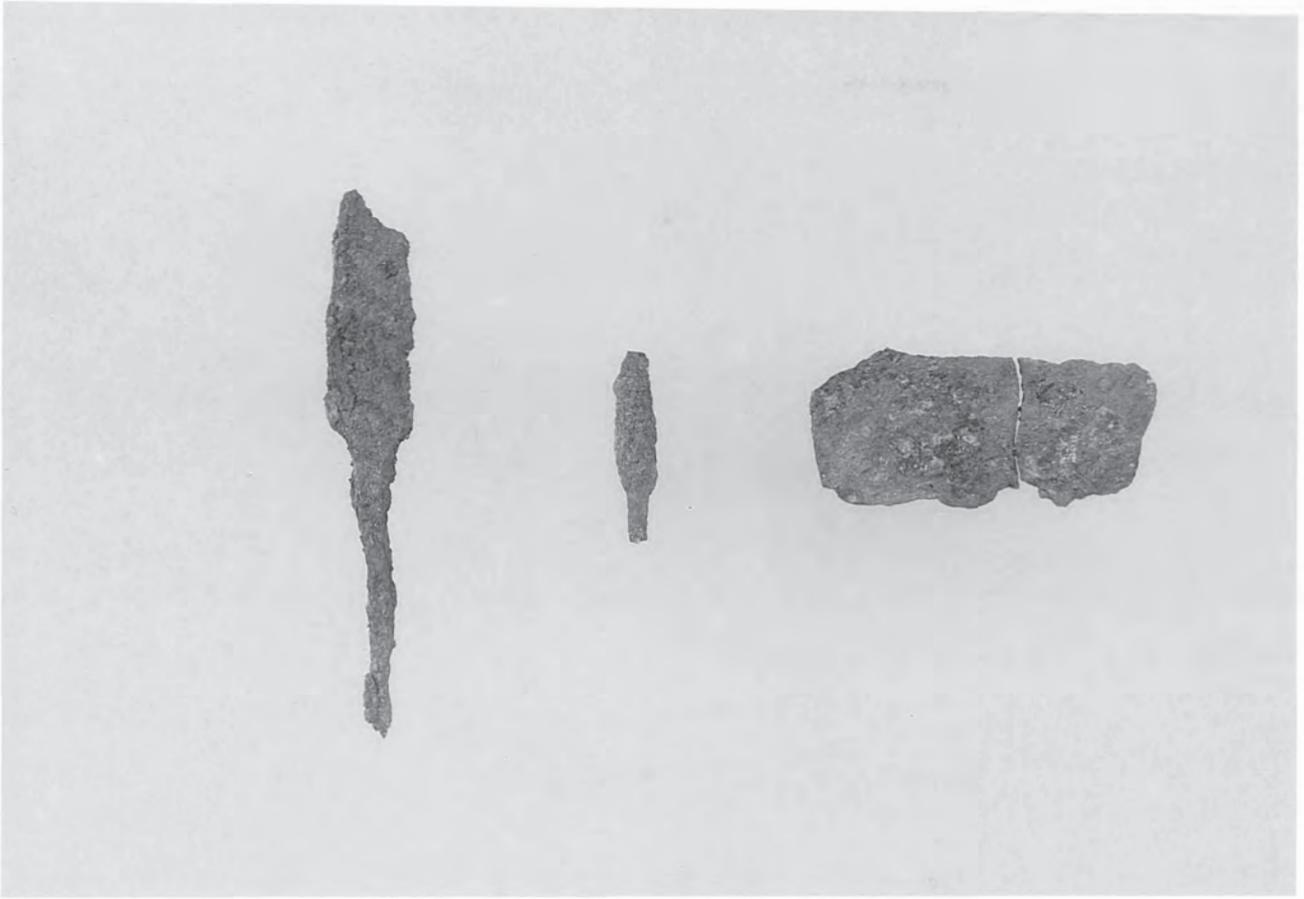
第8図版



出土土器（第7図の一部）

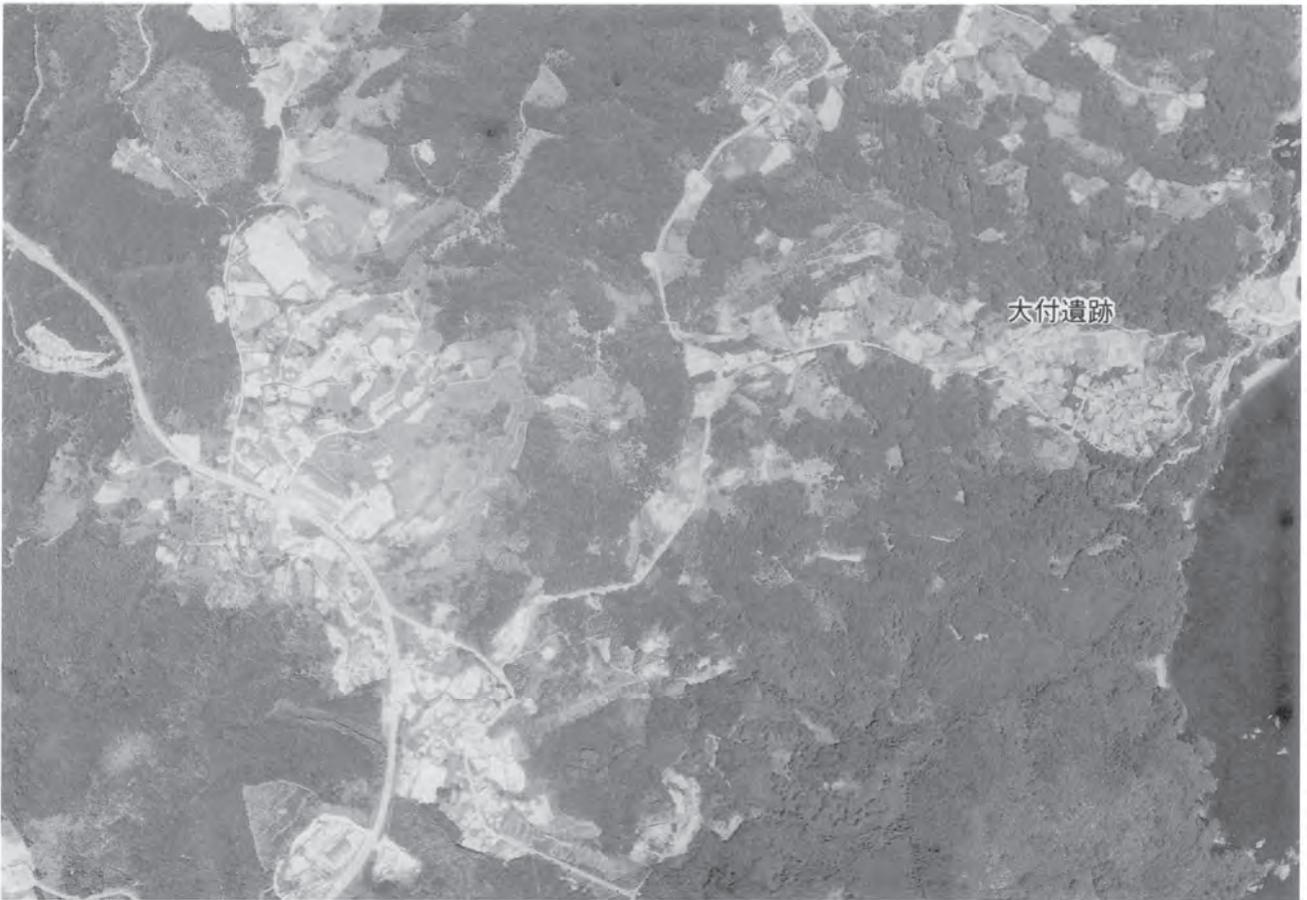


出土石器と軽石



出土鉄製品（第12図）

大付遺跡（写真図版）

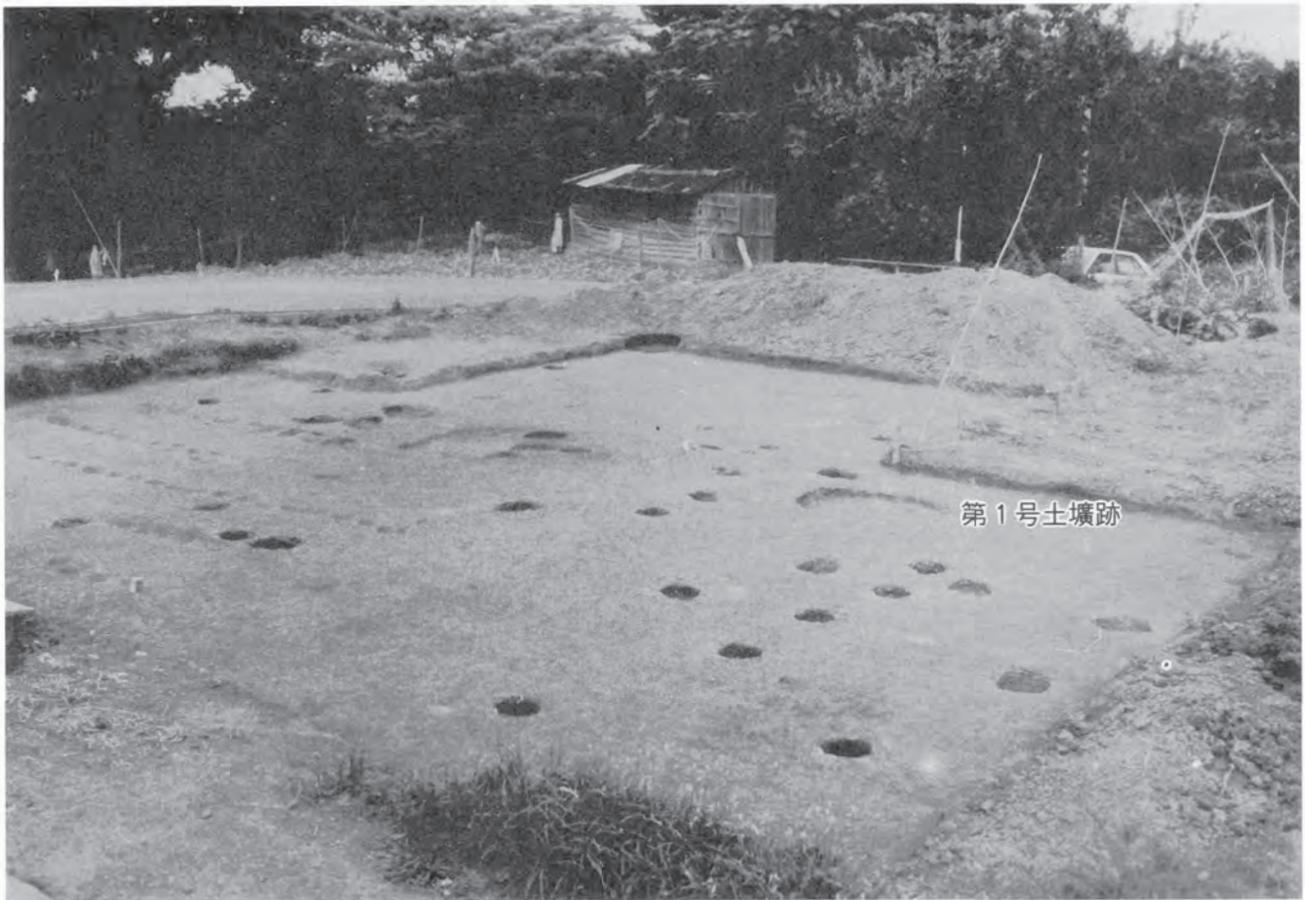


崎山遺跡群と大付遺跡（空中写真）



調査区景観

第11図版



遺構の検出状況①



遺構の検出状況②



第1号土坑跡（完掘）



第1号土坑跡（上層断面）

第13図版



第1号土壙跡出土土器



第1号土壙跡出土礫石器



遺構外出土礫石器（第20図1）



遺構外出土石器（第20図2、3）と扁平円礫

宮古市埋蔵文化財調査報告書30

金浜 I 遺跡

—昭和58年度発掘調査報告書—

大付遺跡

—平成2年度発掘調査報告書—

1992.3

発行 岩手県宮古市教育委員会
〒027 宮古市新川町2番1号
TEL.0193-62-2111

印刷 株式会社文化印刷
岩手県宮古市大通2丁目5の2